京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2020-8

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　二〇二〇-八
平安京右京六条一坊三町跡・御土居跡
公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

平安京右京六条一坊三町跡・御土居跡

2021年

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

平安京右京六条一坊三町跡・御土居跡

2021年

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

1　極印鑽

2　極印鑽印面

序　　文

京都市内には、いにしえの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、京都市中央卸売市場施設整備に伴う平安京跡・御土居跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

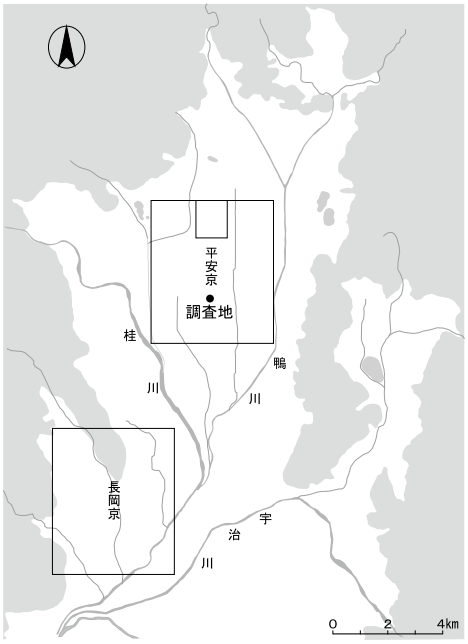
令和３年６月

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

所　長　　井　上　満　郎

例　　言

1	遺　跡　名	平安京跡・御土居跡　（京都市番号　20Ｈ363）
2	調査所在地	京都市下京区中堂寺南町130番地１の一部
3	委　託　者	京都市　代表者　京都市長　門川大作
4	調 査 期 間	2021年１月18日～2021年３月４日
5	調 査 面 積	240㎡
6	調査担当者	柏田有香・木下保明
7	使 用 地 図	京都市発行の都市計画基本図（縮尺１：2,500）「島原」を参考にし、作成した。
8	使用測地系	世界測地系　平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
9	使 用 標 高	T.P.：東京湾平均海面高度
10	使用土色名	農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』に準じた。
11	遺 構 番 号	通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
12	遺 物 番 号	通し番号を付し、写真番号も同一とした。
13	本 書 作 成	柏田有香 付章１：永井久美男（兵庫埋蔵銭調査会）・西脇　康（東京大学史料編纂所） 付章２：関　晃史（当研究所）・山口繁生（公益財団法人元興寺文化財研究所）
14	備　　考	上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。



（調査地点図）

目　　次

１．調査経過 …… 1
２．位置と環境 …… 2
３．遺　　構 …… 6
（１）基本層序 …… 6
（２）遺構 …… 6
４．遺　　物 …… 10
（１）遺物の概要 …… 10
（２）土器 …… 10
（３）木製品 …… 11
（４）金属製品 …… 12
５．ま と め …… 14
付章１　慶長丁銀の極印鑽について …… 17
付章２　極印鑽の自然科学分析 …… 27

図　版　目　次

巻頭図版１　遺物　１　極印鑽
２　極印鑽印面

図版１　遺構　１　調査区全景（北から）
２　濠１（東北東から）
３　濠１北壁断面（東から）
図版２　遺構　１　井戸２（北西から）
２　井戸２曲物底板出土状況（東北東から）
３　井戸２完掘状況（北西から）

挿　図　目　次

図１　調査地位置図（１：2,500）　……　1
図２　調査区配置図（１：500）　……　2
図３　調査前全景（北から）　……　2
図４　作業状況（北東から）　……　2
図５　周辺調査位置図（１：5,000）　……　3
図６　遺構平面図（１：100）　……　7
図７　調査区断面図（１：100）　……　8
図８　濠１断面図（１：60）　……　9
図９　井戸２実測図（１：40）　……　9
図10　井戸２出土土器実測図（１：４）　……　10
図11　木製品実測図（１：４、木１のみ１：２）　……　11
図12　極印鑽実測図（１：２、１：１）　……　13
図13　御土居関連調査位置図（１：4,000）　……　15

表　目　次

表１　周辺調査一覧表　……　4
表２　遺構概要表　……　6
表３　遺物概要表　……　10

平安京右京六条一坊三町跡・御土居跡

1．調査経過

今回の調査は、京都市中央卸売市場第一市場施設整備に伴う埋蔵文化財発掘調査である。京都市中央卸売市場第一市場（以下「中央市場」という）は、JR山陰線丹波口駅の南側一帯に施設が点在する。調査地は、中央市場敷地の北部に位置し、平安京右京六条一坊三町跡および豊臣秀吉が築造した御土居跡にあたる。

調査は、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）の指導のもと、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が実施した。

調査区は、敷地の南側に南北16.5ｍ、東西14.5ｍの範囲に設定した。調査面積は約240㎡である。文化財保護課による事前の試掘調査の結果や周辺調査成果から、調査区全体が御土居の濠跡にあたると推測されており、御土居の濠の規模や形状、埋没時期を明らかにすることを目的として調査を開始した。現地表面から約1.3mまでが汚染土壌であったため、まず、汚染土壌を重機で掘削し搬出した。また、既存建物の基礎は調査区内に残置して調査を行い、一旦調査を終了したのち、解体業者による基礎撤去を経て、調査区の一部の拡張調査と埋め戻しを行い、全ての調査を終了した。調査の結果、基盤層上面で御土居の濠と平安時代前期の井戸を検出し、記録保存を行った。

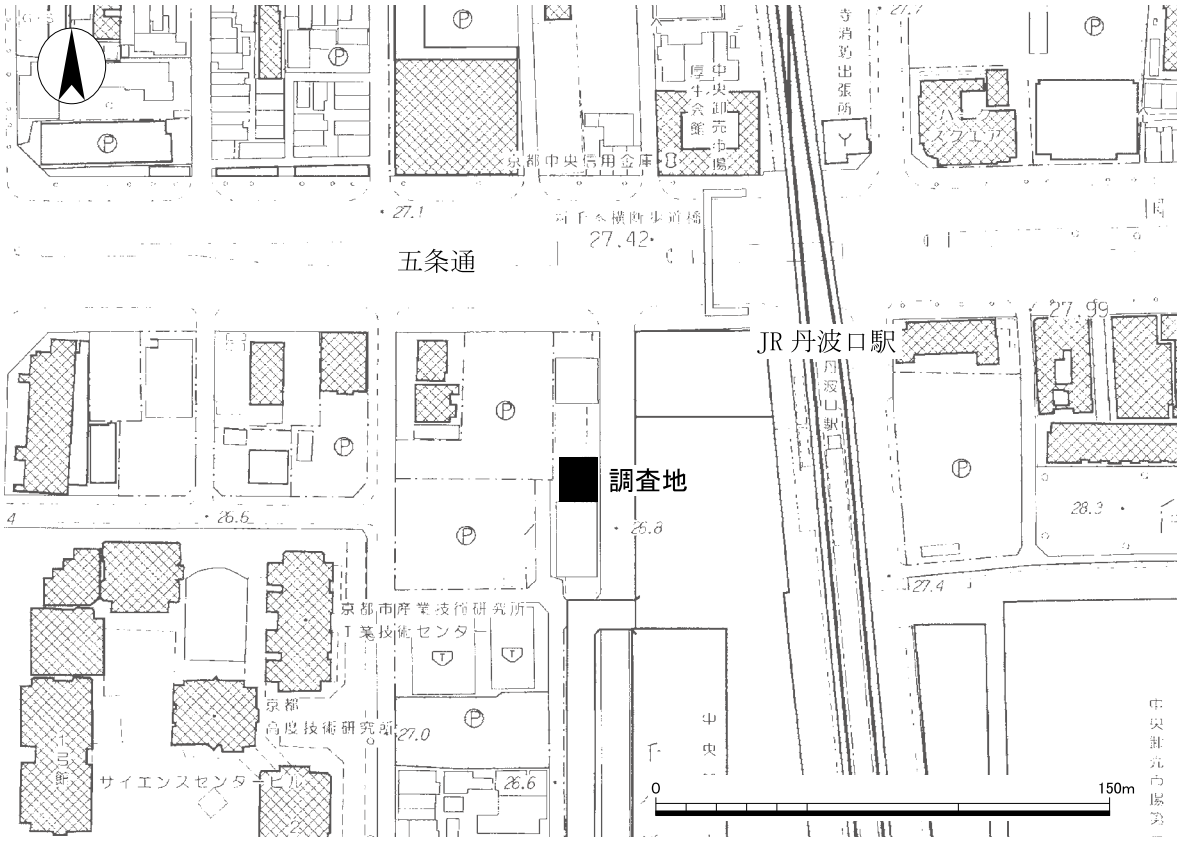


図１　調査地位置図（１：2,500）

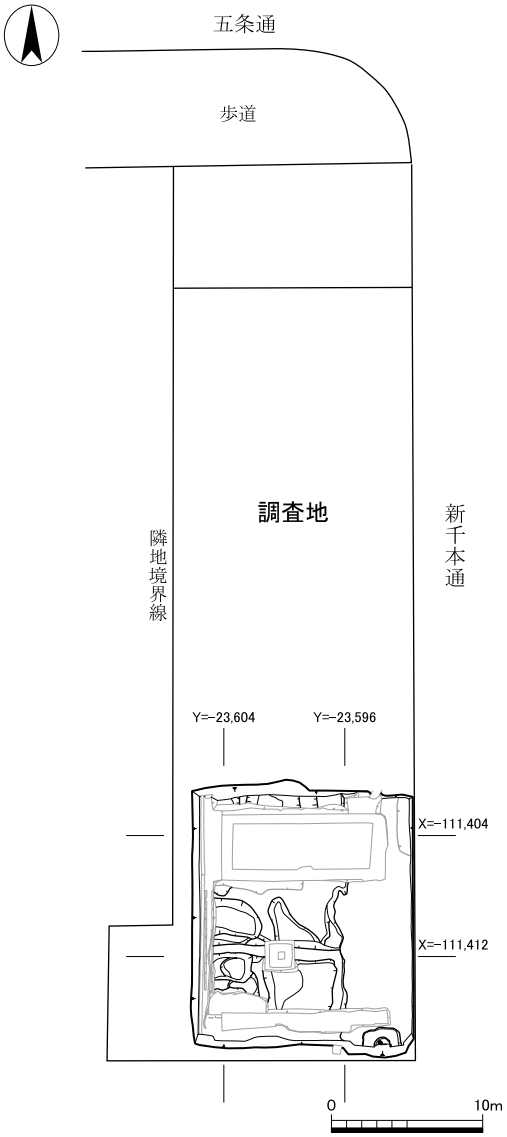


図２　調査区配置図（１：500）

図３　調査前全景（北から）

図４　作業状況（北東から）

調査中には、適宜、文化財保護課と検証委員の立命館大学木立雅朗教授、京都大学伊藤淳史助教による検証を受けた。

２．位置と環境（図５、表１）

調査地は、平安京の条坊では右京六条一坊三町の中央部にあたる。右京六条一坊三町は朱雀大路に面した町で、西は西坊城小路、北は六条坊門小路、南は楊梅小路に区画される。

調査地周辺では、中央市場やその西側に広がる京都リサーチパークの開発、また五条通の拡幅に伴って多数の調査が実施されている（図５）。

主に西坊城小路より西側では、縄文時代から古墳時代の川や湿地が検出されているが、今回の調査地付近では古墳時代以前の明確な遺構は検出されていない。

平安時代の遺構は、今回調査地と同じ右京六条一坊三町内で、平安時代前期の掘立柱建物１棟（SM10）と井戸１基（XF13-1）が検出されているほか、五町では９世紀中頃の１町規模の邸宅跡の存在が明らかとなっている（XF２）。十一・十二・十三・十四町でも９世紀を通じて、４分の１町から１町規模の宅地利用が行われたことがこれまでの調査でわかってきている。これらの宅地利用は10世紀初頭で一旦途絶え、平安時代中期の遺構はほとんど確認されていない。

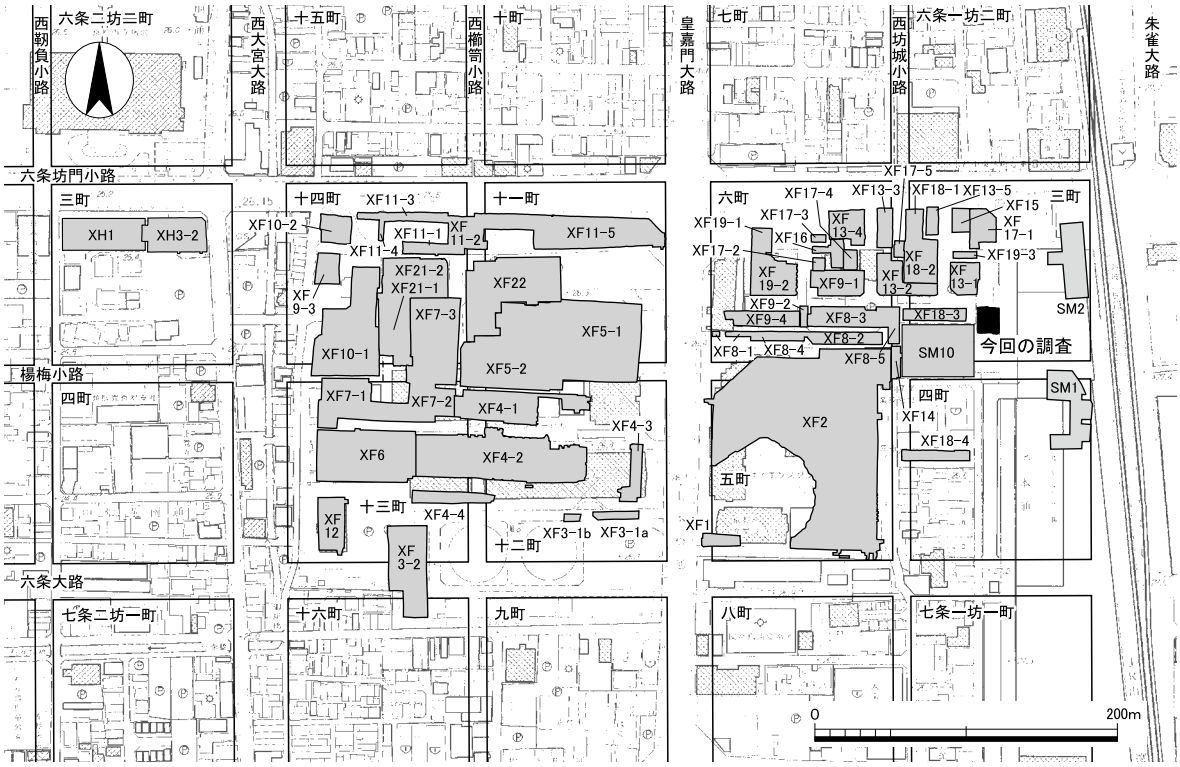


図５　周辺調査位置図（１：5,000）

その後、平安時代後期から鎌倉時代にかけて、皇嘉門大路の東側では再開発が行われたようで、楊梅小路や西坊城小路の側溝が掘削され（XF７・８・10・13・14・17・18、SM10）、楊梅小路に面して開く門（XF２、SM10）や、小規模な掘立柱建物群が見つかっている。六町域では御堂と考えられる建物（XF19-2）や園池（XF８・９・19）も検出されている。

室町時代以降は耕作地化したと考えられ、耕作に伴う溝や井戸、土取穴などが検出されている。安土桃山時代には、天正十九年（1591）に豊臣秀吉により築造された御土居の南西辺が現在の千本通付近を南北にはしり、今回の調査地もその一部に含まれる。調査地の北側では、江戸時代に埋没した濠跡が検出されている（XF13・17・19）。御土居濠埋没後は近世を通じて畑地であったようで、芹・水菜や地名を冠された「中堂寺大根」などの蔬菜の生産が行われていたようである[1)]。近代には、調査地の西側に、明治四十年（1907）に京都競馬場、同四十二年（1909）に大阪瓦斯京都工場が建設され、今回調査地は、昭和二年（1927）に開設された京都市中央卸売市場の一部となり現在にいたる。

註

１）「大内村」『史料京都の歴史』第12巻下京区　平凡社　1981年

表１　周辺調査一覧表

調査記号	条坊町名	所在地	調査期間	調査面積（㎡）	主な成果	文献番号
SM 1･2	六条一坊三町・四町	中堂寺南町	1979.03.10 ～06.11	2,000	［平安時代後期］溝 ［室町時代］井戸	1
XF1	六条一坊五町	中堂寺南町17他	1987.08.03 ～08.04	55	［平安時代末～鎌倉時代前期］皇嘉門大路東側溝	2
XF2	六条一坊五町	中堂寺南町	1987.09.16 ～1988.04.21	9,646	［平安時代前期］掘立柱建物、井戸、皇嘉門大路東側溝 ［平安時代後期～鎌倉時代］掘立柱建物、井戸、門	3
XF3	六条一坊十二町・十三町、七条一坊十六町	中堂寺粟田町1	1987.03.28 ～1989.06.07	1,610	［縄文～古墳時代］湿地 ［平安時代］六条大路北側溝	4
XF4	六条一坊十二町・十三町	中堂寺粟田町1	1989.07.20 ～1990.05.30	5,670	［平安時代］掘立柱建物、井戸、西櫛笥小路東側溝 ［平安時代末～鎌倉時代］西櫛笥小路西側溝	5
XF5	六条一坊十一町	中堂寺粟田町	1991.02.12 ～6.19	6,050	［平安時代］掘立柱建物、井戸、西櫛笥小路西側溝	6
XF6	六条一坊十三町	中堂寺粟田町1	1991.11.18 ～1992.03.07	2,000	［縄文～弥生時代］流路 ［平安時代］掘立柱建物、井戸、溝	7
XF7	六条一坊十三町・十四町	中堂寺粟田町1	1992.07.13 ～1993.01.14	3,805	［縄文～弥生時代、古墳時代］流路 ［平安時代］楊梅小路路面、南北両側溝、掘立柱建物	8
XF8	六条一坊六町	中堂寺南町	1993.08.07 ～1994.03.24	1,400	［縄文～古墳時代］湿地 ［平安時代前期］掘立柱建物、井戸 ［平安時代後期～鎌倉時代］掘立柱建物、井戸、池跡、西坊城小路西側溝	9
XF9	六条一坊六町・十四町	中堂寺南町地内	1994.04.18 ～08.31	1,247	［縄文～古墳時代］湿地 ［平安時代後期～鎌倉時代］井戸、池跡、溝	9
XF10	六条一坊十四町	中堂寺粟田町地内	1994.08.29 ～1995.02.24	2,770	［古墳～平安時代後期］川跡 ［平安時代前期］井戸、掘立柱建物、楊梅小路北側溝	9
XF11	六条一坊十一町・十四町	中堂寺粟田町地内	1995.04.10 ～12.01	3,320	［縄文～古墳時代］川跡 ［平安時代前期］掘立柱建物、井戸	9
XF12	六条一坊十三町	中堂寺粟田町地内	1996.09.02 ～12.28	650	［平安時代前期］池、掘立柱建物	10
XF13	六条一坊三町・六町	中堂寺南町地内	1997.07.13 ～12.19	1,894	［平安時代前期］掘立柱建物 ［鎌倉時代］池、井戸、西坊城小路側溝 ［江戸時代］御土居濠	9
XF14	六条一坊六町	中堂寺南町地内	1998.10.26 ～12.04	120	［平安時代後期］井戸、西坊城小路西側溝 ［鎌倉時代］西坊城小路西側溝	9
XF15	六条一坊三町	中堂寺南町地内	1999.01.29 ～03.10	210	［平安時代後期］井戸	9
XF16	六条一坊六町	中堂寺南町地内	1999.09.26 ～10.26	230	土取り跡	9
XF17	六条一坊三町・六町	中堂寺南町地内	2000.01.18 ～04.06	627	［平安時代末～鎌倉時代］西坊城小路西側溝 ［江戸時代］御土居濠	9
XF18	六条一坊三町・四町	中堂寺南町地内	2000.04.09 ～10.05	1,385	［平安時代末～鎌倉時代］西坊城小路東側溝	9
XF19	六条一坊六町	中堂寺南町地内	2001.12.03 ～2002.05.23	1,058	［平安時代以前］川 ［鎌倉時代］建物（御堂）、池跡 ［江戸時代］御土居濠	9
XH1	六条二坊三町	西七条東御前田町地内	2006.11.28 ～2007.03.16	1,160	［古墳時代］流路 ［平安時代］池、埋納土坑、柵、溝など	11
XH3-2	六条二坊三町	西七条東御前田町地内	2007.08.21 ～12.21	840	［弥生時代］流路 ［平安時代前期］掘立柱建物、溝、埋納土坑など	12
SM10	六条一坊三町	中堂寺南町地内	2008.05.08 ～09.18	1,670	［平安時代前～中期］掘立柱建物 ［平安時代後期～鎌倉時代］西坊城小路東側溝、楊梅小路北溝、門、井戸 ［室町時代］溝 ［江戸時代］土取土坑	13
XF21	六条一坊十四町	中堂寺粟田町地内	2008.10.03 ～2009.03.19	1,950	［弥生時代］溝 ［平安時代前期］建物、門、柵、溝 ［平安時代後期］落ち込み、溝	14
XF22	六条一坊十一町	中堂寺粟田町地内	2018.07.17 ～11.05	2,390	［平安時代］溝 ［平安時代末～鎌倉時代］溝	15
SM14	六条一坊三町	中堂寺南町 130番地1の一部	2021.01.18 ～03.04	240	［平安時代］井戸 ［江戸時代］御土居濠	本報告

※ 調査記号　SMは京都市中央卸売市場関連、XFは大阪ガス京都工場跡地･リサーチパーク関連、XHは五条通拡幅工事関連の調査。

文献一覧（表１　周辺調査一覧表）

１　網　伸也「平安京右京六条一坊三・四町」『昭和53年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2011年

２　小森俊寛「平安京右京六条一坊」『昭和62年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1991年

３　梅川光隆・杉山信三ほか『平安京右京六条一坊　－平安時代前期邸宅跡の調査－』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第11冊　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1992年

４　長宗繁一「平安京右京六・七条一坊」『平成元年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1994年

５　長宗繁一「平安京右京六条一坊」『平成元年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1994年

６　平尾政幸「平安京右京六条一坊」『平成２年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1994年

７　平尾政幸「平安京右京六条一坊」『平成３年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1995年

８　平尾政幸「平安京右京六条一坊」『平成４年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1995年

９　平尾政幸ほか『平安京右京六条一坊・左京六条一坊跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2002－6　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2002年

10　平尾政幸「平安京右京六条一坊」『平成８年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1998年

11　小檜山一良・卜田健司『平安京右京六条二坊三町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006－25　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2006年

12　小檜山一良ほか『平安京右京六条二坊三・六町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2007－14　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2008年

13　布川豊治ほか『平安京右京六条一坊三町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2008－7　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2008年

14　南　孝雄『平安京右京六条一坊十四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2008－22　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2009年

15　松永修平『平安京右京六条一坊十一・十四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2018－9　公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2019年

３．遺　　構

（１）基本層序（図７）

調査地の現地表面の標高は26.6～26.8ｍで、ほぼ平坦であった。現地表面から0.7～1.0ｍまでが現代盛土で、その下に近世から近代の耕作土層が約0.2ｍ堆積する。それを除去すると、砂礫質の基盤層となる。遺構は基盤層上面で検出した。基盤層上面の標高は25.5～25.7ｍである。ただし、現地表面から約1.3ｍに及ぶ汚染土壌を掘削搬出する必要があったため、遺構検出は標高25.3ｍのところで行った。

（２）遺構（図６・７、図版１）

濠１（図８、図版１）　調査区の西側２/３を占める南北方向の濠１を検出した。西肩は調査区外になる。検出幅は約10ｍ、検出長は約16ｍであるが、汚染土壌搬出のため、本来の検出面より低いところで遺構を検出した。そのため、断面で確認した本来の濠の東肩は約1.5ｍ東にある。濠底部は、東西南北に土手状に高く掘り残された部分があり、凹凸が著しい。深さは、今回の調査区内では南東部が最も深く、検出面から約1.5ｍ、標高23.8ｍが底部となる。土手状に掘り残された部分の上面や肩部には、灰黄褐色の固く締まるシルトが貼り付く（図７北壁16層、西壁７層）。掘削時の通路として利用されるなどで、踏み固められた可能性が考えられる。

埋土は、最下層にラミナの確認できるシルトと細砂の互層が堆積する。下層から上層にかけては上方に向かって徐々に粗粒化する粘質シルト～細砂の湿地性堆積物である。断面観察の結果、湿地性堆積物で一度埋まった後、東肩部に幅約2.5ｍ、深さ約0.2ｍの溝を掘りなおしていることが確認できた（図７北壁６～９層）。濠の最上層は人為的な埋土と考えられる礫が多量に混じる固く締まるシルト層である。埋土からは弥生時代から江戸時代の遺物が出土した。

井戸２（図９、図版２）　調査区の南東隅で検出した。南半は調査区外になる。掘形は隅丸方形で、一辺約2.4ｍ、深さは約1.1ｍある。底面の標高は24.35ｍである。井戸枠は円形で、直径は約1.05ｍある。枠材は残存しないが、井戸枠の東壁面の一部で鉄分を多量に含む硬化した土が確認できた。硬化土の厚さは0.1～0.15ｍあり、井戸枠材の影響を受け部分的に硬化したか、硬い土を井戸枠として貼り付けたものの可能性がある。井戸底から、曲物の底板が出土した。掘形埋土や井戸枠埋土から平安時代前期の遺物が出土した。

表２　遺構概要表

時　　代	遺　　構	備　　考
平安時代	井戸２	
安土桃山時代～江戸時代	濠１	

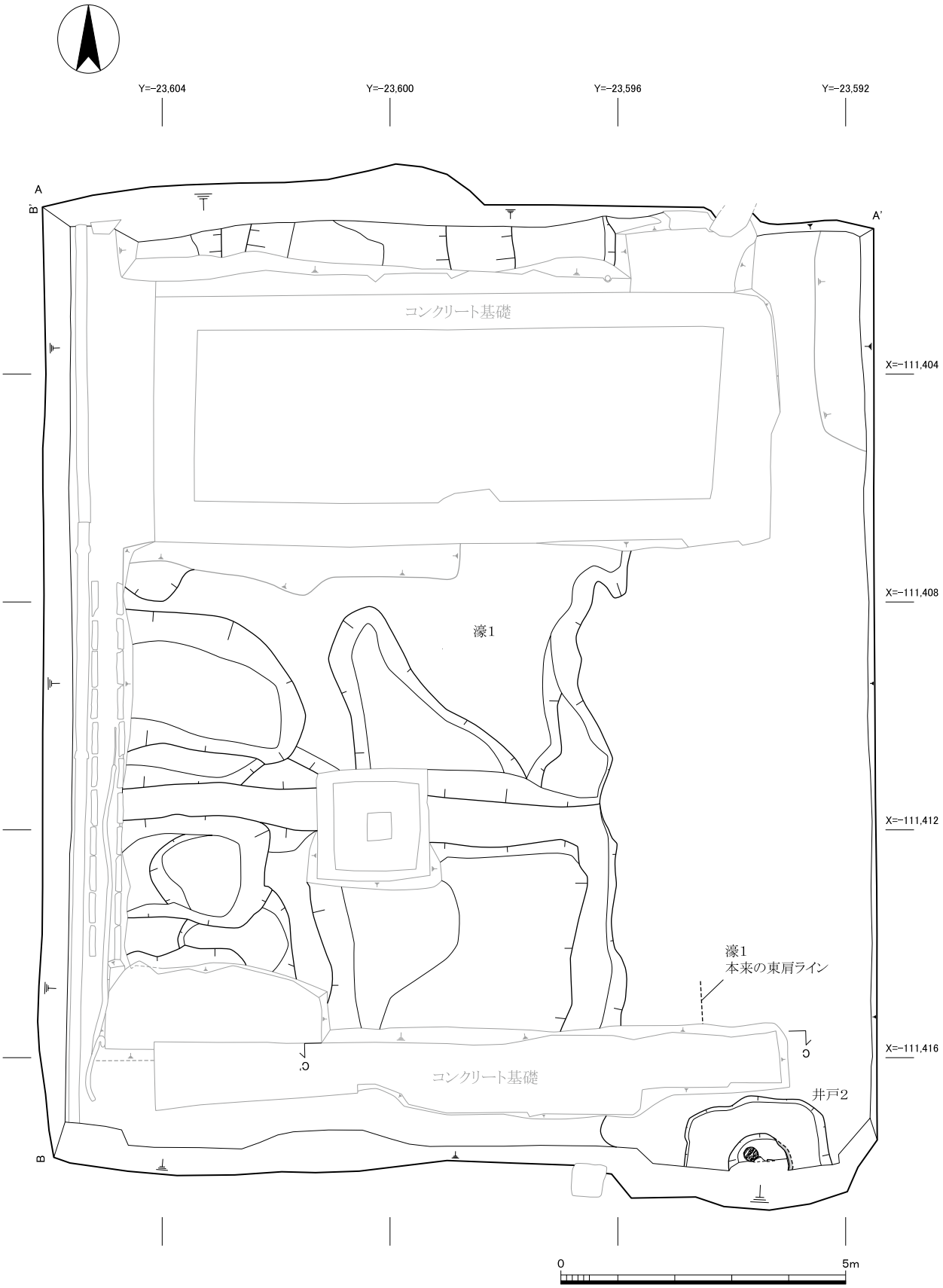
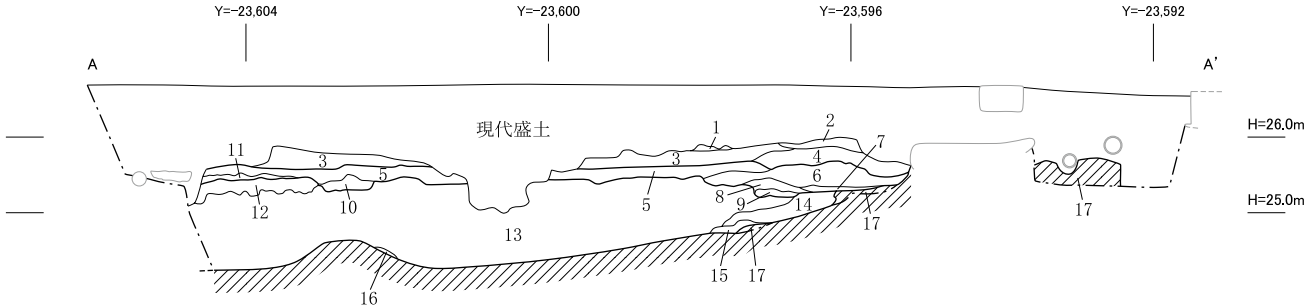


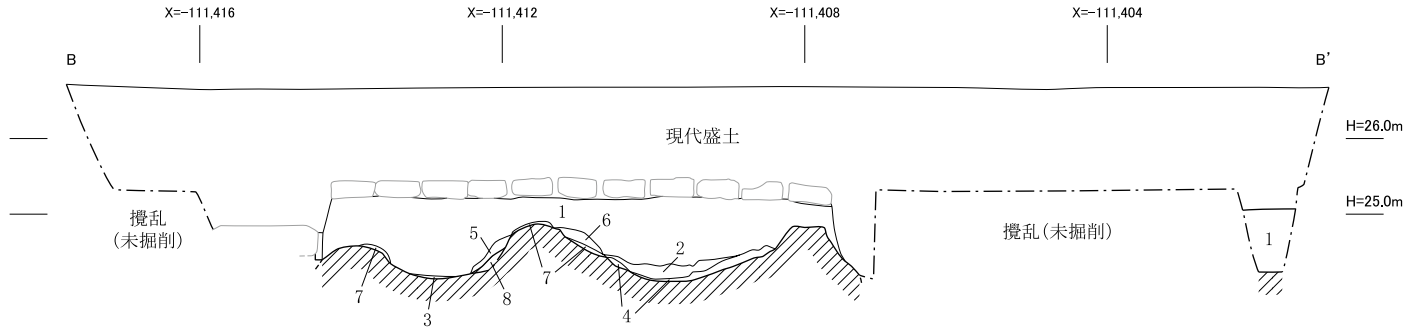
図６　遺構平面図（１：100）

北壁断面



1　10YR4/1褐灰色　粘質シルト(近代耕作土)
2　10YR3/2黒褐色　シルト～細砂　φ1～3cmの礫少量混
3　10YR3/1黒褐色　シルト　中～粗砂混　φ1～5cmの礫・骨片多量混(近世耕作土)
4　10YR4/2灰黄褐色　シルト～細砂　φ1～10cmの礫・炭化物多量混(畔状高まり)
5　2.5Y4/1黄灰色　シルト　やや粘質　粗～極粗砂多量混　φ1～3cmの礫多量混　固く締まる(埋め戻し土)
6　10YR5/6黄褐色　中～極粗砂　φ1～5cmの礫多量混(基盤層砂礫由来)
7　10YR3/2黒褐色　細砂　シルトブロック少量混
8　10YR3/1黒褐色　粘質シルト
9　2.5Y4/1黄灰色　粗～極粗砂　φ1～5cmの礫多量含む　シルトブロック混
10　2.5Y5/3黄褐色　中～粗砂　小礫少量混(流水堆積)
11　2.5Y3/1黒褐色　粘質シルト(湿地性堆積)
12　5Y4/2灰オリーブ色　細砂に2.5Y4/2暗灰黄色シルトの大ブロック混　固く締まる(埋め戻し土)
13　2.5Y3/1黒褐色　粘質シルト～細砂　上方に向かって漸次粗粒化　上層は砂粒含む(湿地性堆積)
14　5Y3/1オリーブ黒色　中～極粗砂　φ1～5cmの礫多量混　シルトブロック混
15　5Y4/1灰色　粘質シルト(湿地性堆積)
16　10YR4/2灰黄褐色　シルト　固く締まる
17　10YR4/3にぶい黄褐色　中～極粗砂　φ1～5cmの礫多量混(基盤層)

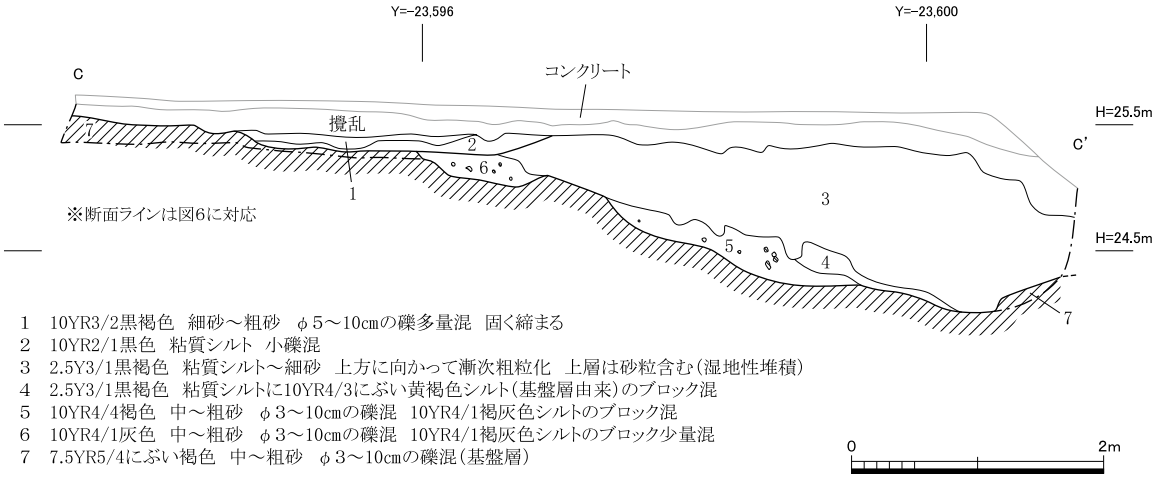
西壁断面



1　2.5Y3/1黒褐色　粘質シルト～細砂　上方に向かって漸次粗粒化　上層は砂粒含む(湿地性堆積)
2　10Y4/1灰色　シルトと細砂の互層　ラミナあり(流水堆積)
3　10Y5/1灰色　シルトと細砂の互層　ラミナあり(流水堆積)
4　10Y3/1オリーブ黒色　細砂　粗砂・φ1～5cmの礫混
5　10Y4/1灰色　シルト　粗砂・φ3～5cmの礫多量混
6　2.5Y3/1黒褐色　シルト　粗砂・φ3～5cmの礫多量混
7　10YR4/2灰黄褐色　粘質シルト　固く締まる
8　10YR4/4褐色　粗砂　φ1～10cmの礫多量混(基盤層)

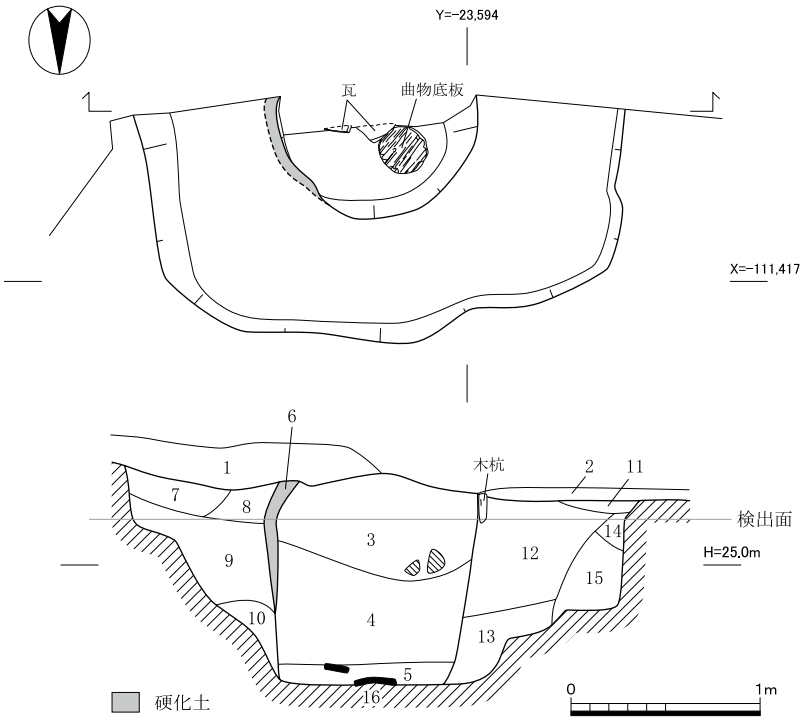
※断面ラインは図6に対応

図7　調査区断面図（1：100）



1　10YR3/2黒褐色　細砂～粗砂　φ5～10cmの礫多量混　固く締まる
2　10YR2/1黒色　粘質シルト　小礫混
3　2.5Y3/1黒褐色　粘質シルト～細砂　上方に向かって漸次粗粒化　上層は砂粒含む(湿地性堆積)
4　2.5Y3/1黒褐色　粘質シルトに10YR4/3にぶい黄褐色シルト(基盤層由来)のブロック混
5　10YR4/4褐色　中～粗砂　φ3～10cmの礫混　10YR4/1褐灰色シルトのブロック混
6　10YR4/1灰色　中～粗砂　φ3～10cmの礫混　10YR4/1褐灰色シルトのブロック少量混
7　7.5YR5/4にぶい褐色　中～粗砂　φ3～10cmの礫混(基盤層)

図８　濠１断面図（１：60）



1　10YR4/2灰黄褐色　細砂　粗砂～小礫混　炭化物少量混(近世耕作土)
2　10YR3/2黒褐色　シルト～細砂　粗砂～小礫混　固く締まる(耕作床土か)
3　2.5Y3/1黒褐色　粘質シルト～細砂　φ5～15cmの礫混　炭化物少量混
4　10YR2/1黒色　粘質シルトに2.5Y3/1黒褐色細砂ブロック多量混　φ3～5cmの礫混
5　10YR2/1黒色　粘質シルト　瓦・土器含む
6　10YR4/4褐色　シルト～細砂　極粗砂混　固く締まる　鉄分多量含む
7　10YR4/1灰色　シルトに10YR5/3にぶい黄褐色シルトブロック混
8　10YR4/1灰色　極細砂～細砂　小礫少量混
9　10YR3/1黒褐色　シルト～細砂　小礫少量混　鉄分多量含む
10　2.5Y3/1黒褐色　粘質シルト　φ1～5cmの礫少量混
11　10YR3/1黒褐色　細～中砂　小礫混
12　2.5Y4/1黄灰色　細砂　小礫少量混　骨片含む
13　2.5Y3/1黒褐色　粘質シルト　粗砂少量混
14　10YR3/1黒褐色　極細砂
15　2.5GY3/1暗オリーブ灰色　シルトに10YR3/1黒褐色　粘土ブロック混
16　7.5YR5/6明褐色　粗砂　φ1～10cmの礫多量混(基盤層)

図９　井戸２実測図（１：40）

４．遺　　物

（１）遺物の概要（表３）

遺物は、整理コンテナにして４箱出土した。そのうち２箱が木製品である。出土遺物には、土器・陶磁器類、瓦類、木製品、金属製品がある。遺物の帰属時期は、平安時代、室町時代、江戸時代のものがある。

濠１からは、17世紀から18世紀初頭の土器・陶磁器類が出土したが、小片のみで図化できるものはなかった。また、古い時代の混入品と考えられる平安時代の土器類や瓦類、室町時代の土器類や木製品、金属製品が出土した。

（２）土器

井戸２出土土器（図10）　井戸２からは、土師器椀・杯・皿・高杯・甕、須恵器壷・甕、緑釉陶器皿、灰釉陶器壷、丸瓦・平瓦、木製品が出土した。

１は土師器杯Ａである。掘形出土。外面をヘラケズリする。２は土師器皿Ａである。井戸枠内出土。１・２は１Ｃ～２Ａ段階に属する[1)]。

３は土師器高杯の脚柱部である。井戸枠内出土。ヘラケズリによる面取りは９面である。

４は須恵器の壷底部である。井戸枠内出土。外面は粗いヘラケズリを行う。内面は自然釉がかかる。

５は緑釉陶器の椀である。掘形出土。焼成は軟質で、底部は削り出しの蛇の目高台である。外面底部にのみ釉薬が残る。

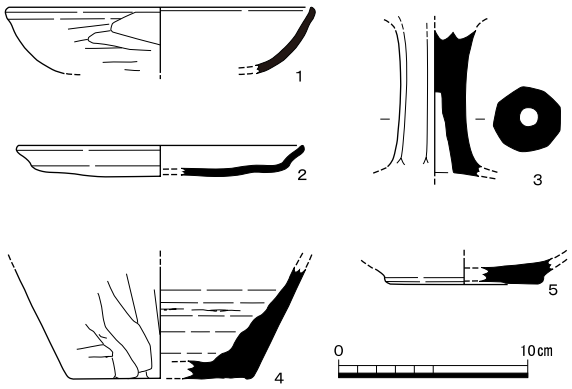


図10　井戸２出土土器実測図（１：４）

表３　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
平安時代	土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、瓦類、木製品		土師器３点、須恵器１点、緑釉陶器１点、木製品５点		
室町時代	土師器、焼締陶器、輸入陶磁器				
安土桃山時代～江戸時代	土師器、焼締陶器、施釉陶器、磁器、木製品、金属製品		木製品18点、金属製品１点		
合　計		７箱	29点（４箱）	１箱	２箱

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、Ａランクの遺物を抽出したため、出土時より３箱多くなっている。

（３）木製品（図11）

木１～５は井戸２から出土したものである。木１は、草本類の植物繊維をより合わせた縄である。残存長は4.4㎝。木２・３は箸である。木２は箸先を、木３は箸頭を欠損する。木２の樹種はネズコか。木３はスギ。木４は付け木である。樹種はスギ。木５は曲物の底板である。片面に柿渋と思われるものが塗布されている。樹種はヒノキ。

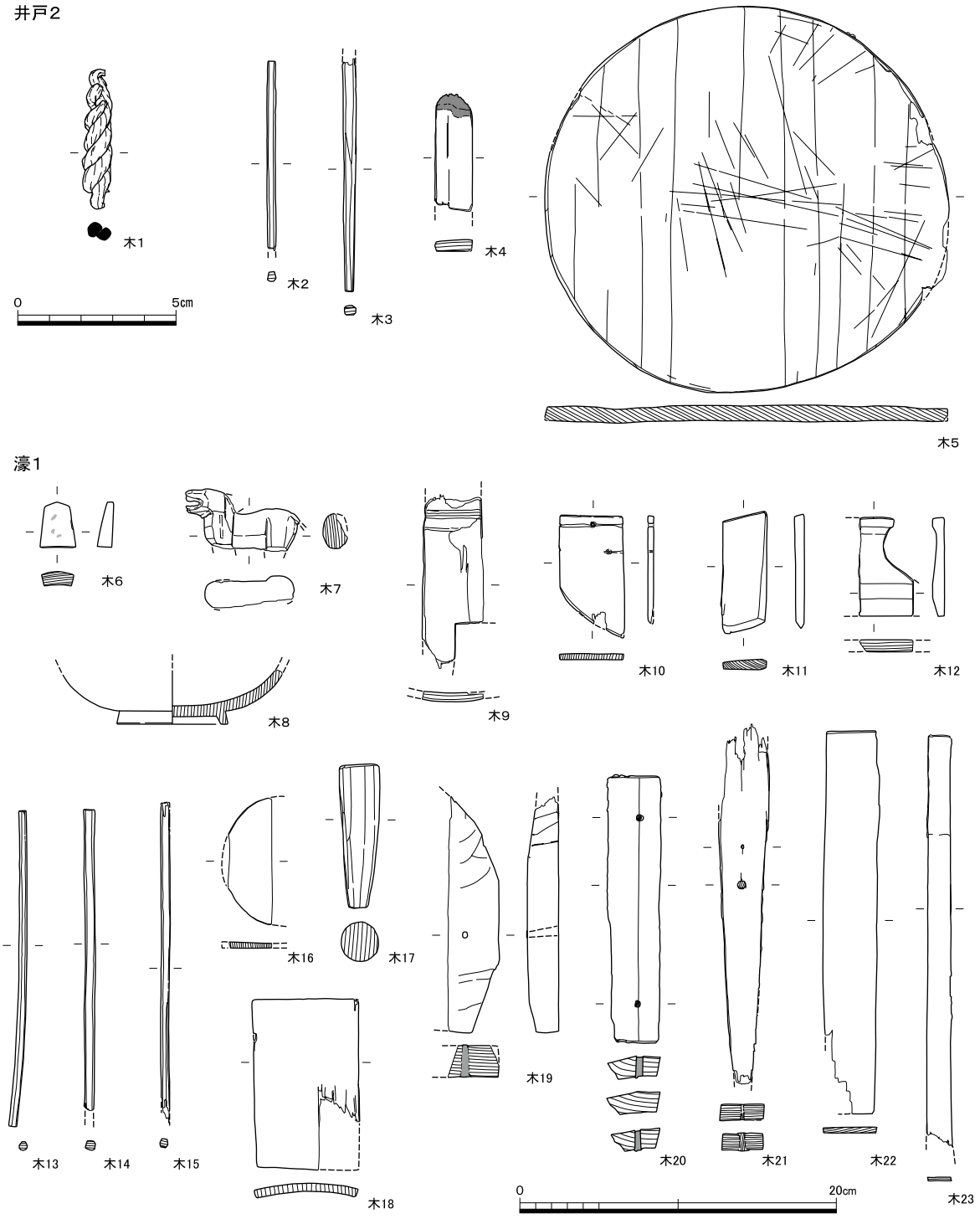


図11　木製品実測図（１：４、木１のみ１：２）

木６～23は濠１から出土したものである。木６は将棋の駒である。片面に漆書きの痕跡がある。樹種はマンサク科のイスノキか。木７は馬形木製品である。頭部の一部と脚部は欠損する。樹種はヒノキ。木８は漆器椀である。全面に黒漆が塗られる。樹種はトチノキ。木９は加工板である。細長い形状で、上半部に紐を括り付けたような圧痕が３条付く。下端部は逆Ｌ字状に切り取られている。樹種はヒノキ科。木10は刷毛か。上半部に穿孔が２箇所と紐を括り付けたような圧痕が１条付く。下端部は斜めに切り取られ、端部は面取り加工されている。樹種はアスナロ。木11は加工板である。細長い形状で、一端が両刃のように面取り加工されている。樹種はスギ。木12は加工木である。両側面を欠損するが、上端の縁状の加工や、湾曲する切り取り加工が施されている。樹種はヒノキ。木13～15は箸である。木13は完存、木14・15は箸先を欠損する。樹種は、木13がヒノキ科、木14がスギ、木15がヒノキである。木16は曲物の底板である。樹種はヒノキ科。木17は木栓である。面取り加工の痕が残る。樹種はスギ。木18は桶の側板である。樹種はスギ。木19は加工木である。両側面は欠損する。上端、下端ともに斜めに切り取られ、鑿の痕跡が残る。中央付近に鉄釘が打ち込まれた状態で残る。樹種はスギ。木20は加工木である。上下２箇所に鉄釘が打ち込まれた状態で残る。樹種はスギ。木21は加工木である。先端が細く加工される。２箇所に木釘が打ち込まれた状態で残る。樹種はヒノキ。木22・23は加工板である。薄く細長い形状の加工品である。いずれも樹種はスギ。

（４）金属製品（図12、巻頭図版１）

金１は、濠１から出土した丁銀に極印を打刻するための極印鑽（たがね）である。調査区南西部、図８の３層中位から出土した。同層からは他に、17世紀から18世紀初頭の土器・陶磁器類が微量出土している。出土時は、全面が鉄錆に覆われており、整理作業時のクリーニングの結果、極印鑽と判明した。共伴遺物の時期や、極印の書体などから慶長丁銀の極印鑽と考えられる。鉄製で、長さ約11.3㎝、重量は532ｇある（詳細な法量は付章１を参照）。最上部は、極印槌を打ち込んだと考えられ、潰れている。極印面は、横約3.4㎝、縦1.7㎝の長方形で、向かって右に「常是」の文字、左に２つの米俵の上に乗り、福袋と打ち出の小槌を持った大黒天の絵が陰刻される。なお、肉眼では判別できないが、Ｘ線ＣＴ撮影の結果、大黒天の足元の米俵の内部に縦に走る凸線が確認されている（付章２参照）。伝製品や出土品の慶長丁銀に打刻された極印のなかにも、俵の中に縦線が入るものがある。また、印面の蛍光Ｘ線分析と蛍光Ｘ線元素マッピング分析では、地金のFe（鉄）以外に、Cu（銅）、Ag（銀）、Pb（鉛）とわずかなAu（金）が検出された（付章２参照）。

註

１）　平尾政幸「土師器再考」『洛史　研究紀要』第12号　公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2019年

750年　840年　930年　1020年　1110年　1170年　1260年　1350年　1410年　1500年　1590年　1680年　1740年　1800年　1860年

1			2			3			4			5		6			7			8		9			10			11			12		13		14	
A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	A	B	C	A	B	C	A	B	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	A	B	A	B

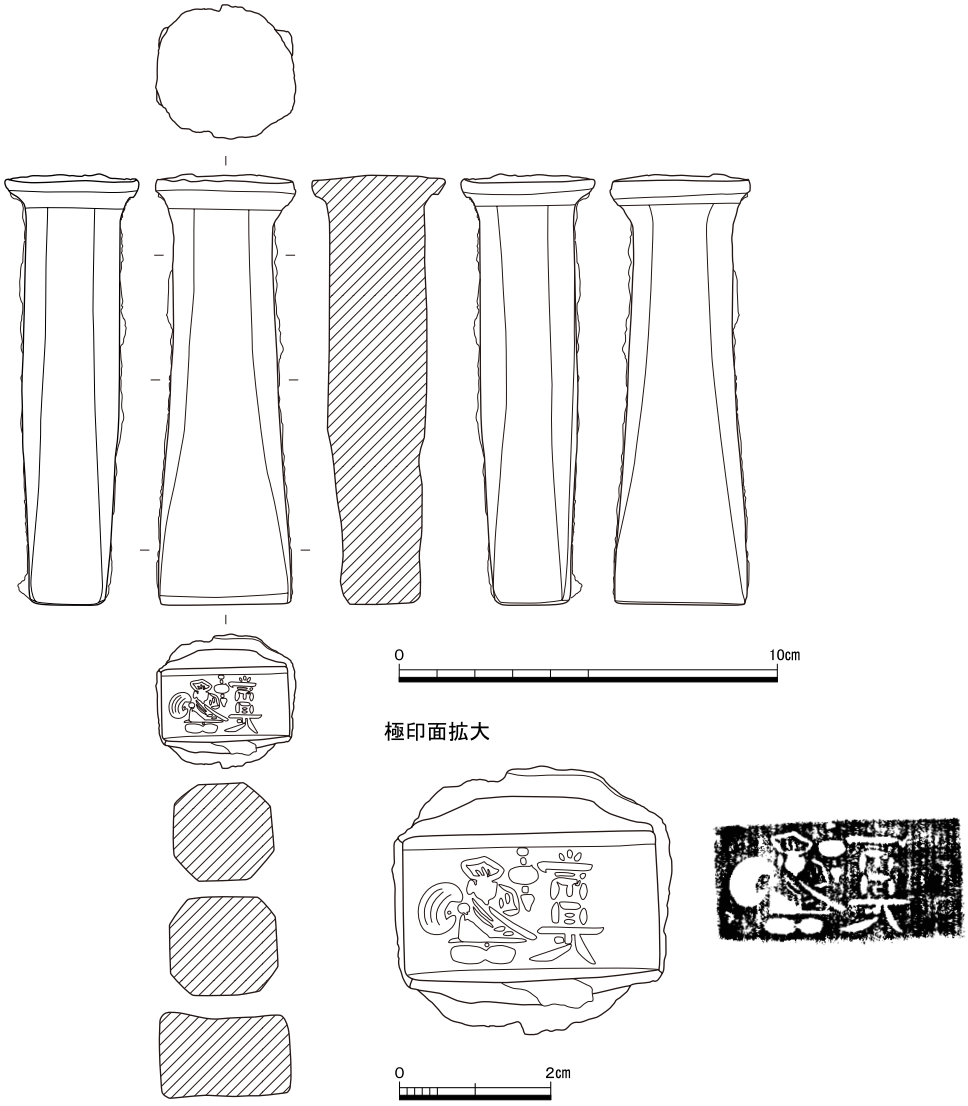


図12　極印鑽実測図（１：２、１：１）

5．まとめ

今回の調査では、南北方向の御土居の濠を検出した。西肩部は調査区外にあり調査できていないが、調査地の北西の敷地で実施された調査（図５－XF13-１）で濠の西肩が検出されており、その成果を参考にすると、濠幅は約13ｍと推測される。中央市場敷地内やその近辺では、他でも御土居の濠や盛土が検出されている（図13）。それらの調査成果[1)]を合わせると、当地付近での御土居の濠は、南北方向で西に約３度振れて存在していたことが明瞭となった。

さらに、濠埋土から慶長丁銀の極印鑽（たがね）が出土したことは注目される。この遺物の評価や丁銀の製造工程における極印鑽の使われ方などについては付章１で詳述されている。そこにも記されているように、慶長丁銀とは、慶長期のみに鋳造されたものではなく、慶長６年（1601）から元禄８年（1695）の間の95年間に渡り、江戸幕府によって鋳造された秤量貨幣である。出土した極印鑽は、字体などから慶長丁銀初期（慶長期から寛永期頃）のものではなく、それ以後の慶長丁銀前期のものであると推定されたが、それは共伴遺物の年代とも矛盾しない。今回、蛍光Ｘ線分析によって極印面からCu（銅）、Ag（銀）、Pb（鉛）、とわずかなAu（金）が検出されており（付章２参照）、最上部が潰れていることからも、極印槌を打ち込み、実際に慶長丁銀に打刻するために使用されたものである可能性が高いと考える。なお、慶長丁銀はAg（銀）とCu（銅）の合金によって作られていたとされるが、江戸期の銀貨における「色揚げ」の実態を解明するために行われた化学分析[2)]では、慶長豆板銀を含むすべての資料から銀、銅とともに鉛が検出され、鉛は「灰吹法」による銀製錬で使用した鉛が残存したものと考えられており、Pb（鉛）が検出されたことは不自然ではないとされた（付章２の（４）参照）。一方で、本来、印面を潰して廃棄されることが原則であるべきものが、京都銀座の所在地である両替町御池から離れた位置の御土居の濠から出土したことや、文献史料から偽丁銀だけではなく極印鑽も精巧に偽造されていたことがわかること（付章１の（８）参照）などから、偽丁銀製造のための道具であった可能性も残る。いずれにせよ、丁銀に関わる極印鑽の出土は全国的にも初めての事例であり[3)]、貨幣製造史を考えるうえで貴重な資料であることは確かであろう。

また、今回の調査では、平安時代前期の井戸１基も検出した。調査地の位置する平安京右京六条一坊三町域では、これまでにも平安時代前期の遺構として掘立柱建物１棟（図５－SM10）と井戸１基（図５－XF13-1）が確認されている。三町は朱雀大路に面する坊城の地として特別街区であることから、これらの遺構は、役所や大規模邸宅に関連する施設である可能性が指摘されている[4)]。今回検出した井戸２や、混入ではあるが御土居の濠の埋土から多数の平安時代の瓦が出土していることは、その傍証となる可能性がある。

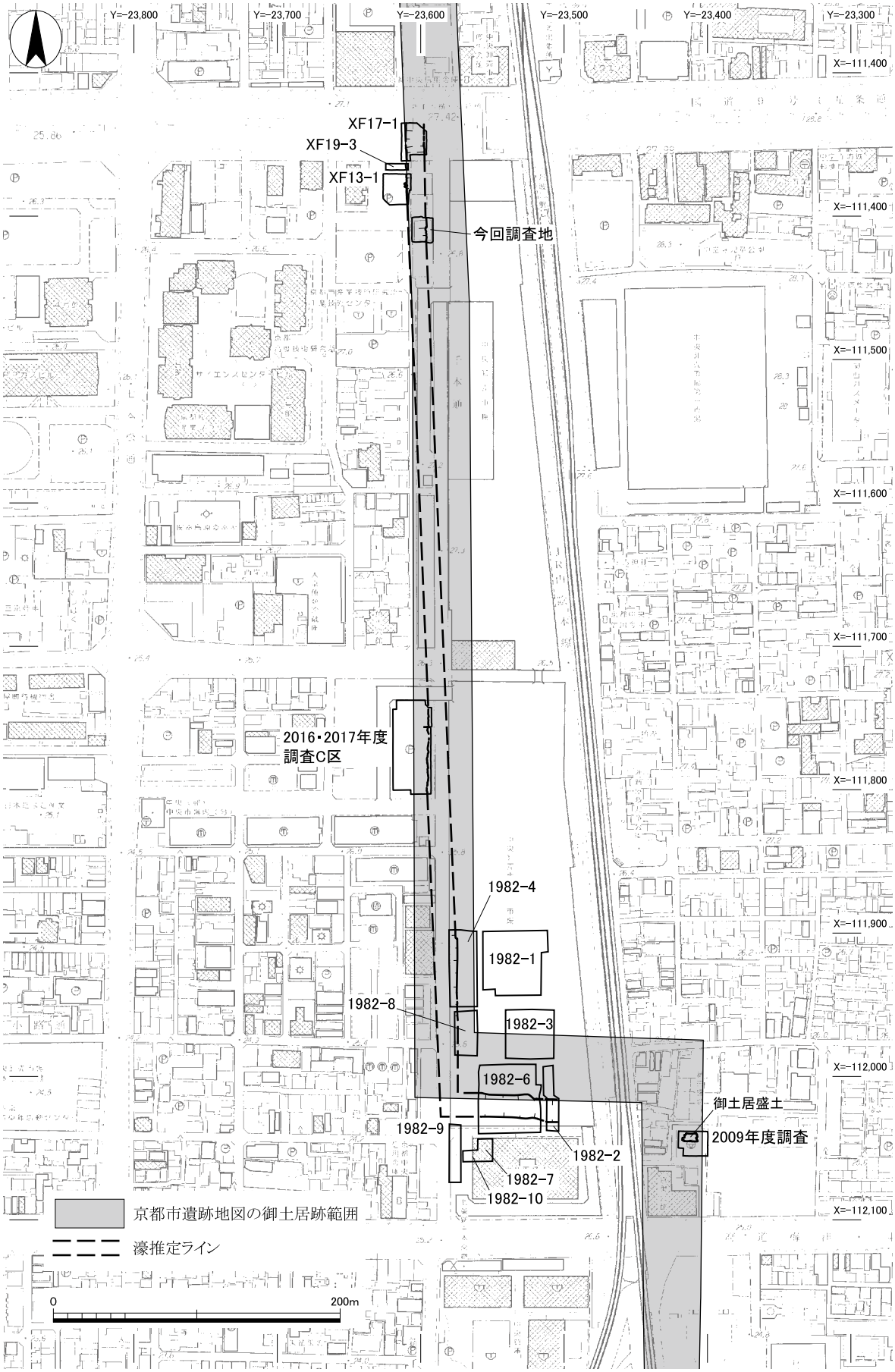


図13　御土居関連調査位置図（1：4,000）

註

1） XF13・17・19：『平安京右京六条一坊・左京六条一坊』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2002－6　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2002年

2016・2017年度調査C区：『平安京右京七条一坊二・四・七・八町跡、御土居跡、堂ノ口町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2017－3　公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2018年

1982－1～10：「右京七条一坊」『昭和57年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1984年、丸川義広「御土居跡の発掘調査とその成果」『日本史研究』420号　1997年

2009年度調査：『平安京左京七条一坊四町跡・御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009－1　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2009年

2） 早川泰弘・三浦定俊・大貫摩里「江戸期銀貨の品位と色揚げに関する科学的調査」『日本銀行金融研究所ディスカッション・ペーパー・シリーズ』№2001-J-14　日本銀行金融研究所　2001年

3） 金座の極印鑽については、後藤勘兵衛家に伝わり現在は京都府が所蔵するもの（『花ひらく町衆文化－近世京都のすがた』京都文化博物館　2021年）や、日本銀行金融研究所貨幣博物館が所蔵するもの（『貨幣博物館　常設展示図録』日本銀行金融研究所貨幣博物館　2017年）がある。貨幣博物館の湯川紅美氏から御教示を得た。

4） 『平安京右京六条一坊三町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2008－7　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2008年

付章１　慶長丁銀の極印鑽（たがね）について

永井久美男（兵庫埋蔵銭調査会）
西脇　康（東京大学史料編纂所）

（１）極印鑽（鏨）の観察

出土した鉄製の鋳物は、近世の慶長丁銀鋳造の極印打ちで使用された極印鑽（鏨）であり、これまで出土事例がなく、全国で初めての発見である。

写真１の極印鑽は全長112.45㎜、横面26.83～35.29㎜、縦面21.82～26.64㎜、重量532gで、全体に鉄錆で覆われている。最上部の極印を打ち込むアタリ面は膨らんでいる。下部の極印面は「常是 大黒天像」であり、製造にあたった銀吹人の大黒常是（湯浅作兵衛）の「常是」字と大黒天像が描かれている。写真２－①はクリーニング作業を始めて極印が確認できた画像であり、写真２－②はクリーニング後の画像である。極印面は縦17.01～17.41㎜、横33.78～33.97㎜を測る。写真２－③は極印面を粘土に押して型取りした画像で、写真２－④は極印面を採拓して反転したものである。したがって、写真２の③④は実際に打たれた極印を復元したと考えてよい。拓影による極印の法量は、横31.96～32.43㎜、縦14.76～15.45㎜であった。

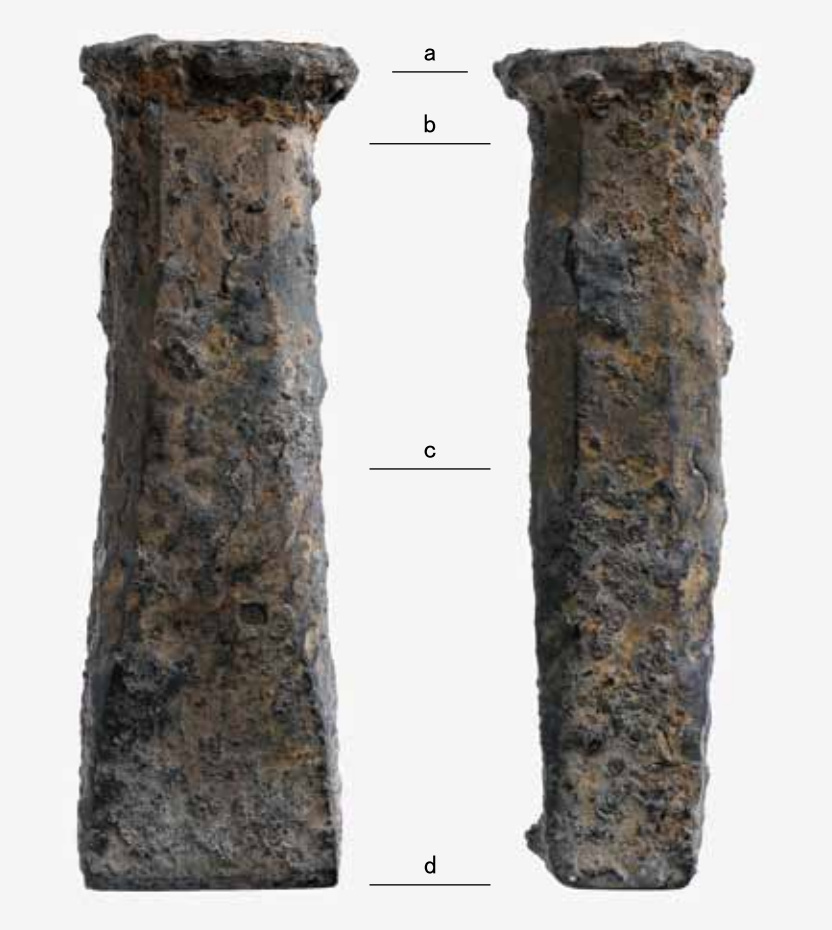


写真１　極印鑽　横面㊧と縦面㊨（原寸）

写真２　極印面①～④

表１　極印鑽の観察

名 称	横･縦	計測点a	計測点b	計測点c	計測点d			備　考
極印鑽	横(幅)	35.29㎜	26.83㎜	29.82㎜	35.09㎜			表面は全体に茶色の鉄錆が見られ、少し凹凸がある。
	縦(厚)	－	26.19㎜	26.64㎜	21.82㎜			
	全長　112.45㎜		重量　532g					
極印面（外枠）	横	最上部　33.97㎜		最下部　33.78㎜				極印面はクリーニングを施した。「常是」と「大黒天像」の間隔がない。
	縦	左側　17.29㎜		中央　17.41㎜		右側　17.01㎜		

（２）慶長丁銀の極印

慶長丁銀はなまこ形の秤量貨幣で、江戸幕府が慶長６年（1601）から元禄８年（1695）に至る95年間鋳造され、「常是 大黒天像」と「寶 常是」の２種類の極印が打ち込まれている。慶長丁銀は当初、必要に応じてたがねで切断して使用していたため、丁銀の補助である小玉銀（こだまぎん）は鋳造されなかった。小玉銀の鋳造は元和年間（1615－1624）に丁銀の切遣いが禁止された以降といわれるが、その根拠となる史料は確認されていないため断定できない。

出土した極印鑽は「常是 大黒天像」の極印であり、慶長丁銀と切断された慶長丁銀の出土資料から切遣いされた慶長丁銀初期（慶長期から寛永期頃迄と推定）のものではなく、その後に鋳造された慶長丁銀前期のものと推定した。

写真３は慶長丁銀初期に鋳造された慶長丁銀の切銀（「元折（もとおれ）」という）である。この資料は、明治44年（1911）３月８日に兵庫県川辺郡小浜村のうち安倉村字柿畑（現宝塚市安倉北３丁目）の畑を開墾中に素焼きの甕を掘り出したことで発見された。甕の中には天正大判３枚・丁銀１貫800匁が確認されたという。主要品は東京帝室博物館が買い上げ、現東京国立博物館所蔵（東京帝室博物館より移管）の安倉出土の慶長丁銀は完形品４点と極印を有する切銀17点がある[1)]。

慶長丁銀初期の極印の文字は小さく、「常是」⑤の書体も後鋳品と異なり、切遣いされるので比較的平たく薄手である。慶長丁銀は両端（左右）と中央の片脇の３箇所に「常是 大黒天像」の極印が打たれ、その他の両脇には「寶 常是」字の極印が打たれているが、極印の向きは上部と下部が逆である。職人２人一組で行う極印打上では、極印当が丁銀を押さえ極印鑽を支えて極印槌打し、丁銀を反転して同様の作業をしたためであろう（写真９参照）。

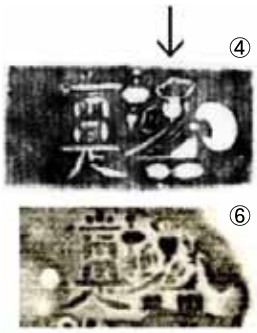


写真３　安倉出土の慶長丁銀初期切銀　68.81×41.35㎜・重量125g・厚6.08㎜　東京国立博物館蔵

（３）極印鑽の極印

慶長丁銀は95年間も鋳造されたため、時期によって極印の書体が変化している。出土した極印鑽の極印と同じ資料を確認することはできないが、近似するものとして、写真４の京都市上京区の千本出水出土（京都府立京都学・歴彩館蔵）の慶長丁銀前期と、写真５の黒川古文化研究所蔵の慶長丁銀前期と慶長小玉銀がある。千本出水の出土事例は昭和40年（1965）１月31日に千本通西側歩道の下水工事中、作業員が壷に入った金銀貨を発見した。金銀貨は全て慶長金銀貨であり、内訳は小判７点、一分金24点、丁銀（完形品）９点、小玉銀35点で、一括して京都府が買い上げた。[2)]

慶長丁銀の「常是 大黒天像」の極印は、全体が打ち込まれた完形極印が殆どなく、極印の一部分が欠けているものが多い。その原因は丁銀のなまこ形の形状と打たれた位置の問題であり、その場所が平面でなく外側（外周部）に湾曲し、両脇に極印を２箇所打つには幅がたりないからであ

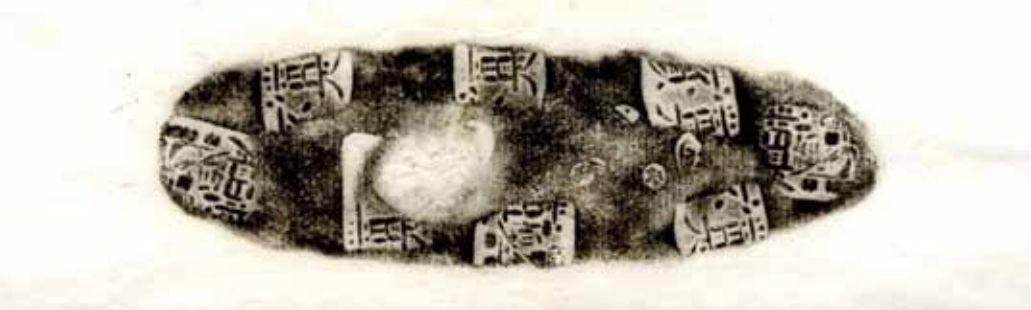


写真４　慶長丁銀前期　千本出水出土　95.04×30.44㎜・重量156.38g・極印８面、
京都府立京都学・歴彩館蔵（旧京都府立総合資料館）　註２より転載

写真５　慶長丁銀前期⑧　105.57×35.95㎜・厚6.67～7.57㎜・重量183.28g・極印９面、
⑨左端から撮影　⑩側面　⑦慶長小玉銀（常是大黒）21.58×19.08㎜・10.78g　黒川古文化研究所蔵

写真６　慶長丁銀前期㊤拓影・㊦写真　104.22×33.92㎜・厚6.91～7.79㎜・
重量183.57g・極印９面　黒川古文化研究所蔵

る。写真５では、⑧表面・⑨左端から撮影・⑩側面でそれが確認できよう。参考資料として掲載した写真５－⑦の慶長小玉銀は、片面に「常是 大黒天像」が打たれている。この極印は本資料と近似しているので、丁銀と小玉銀が同じ極印鑽を使用した可能性も考えられる。

写真６の「常是 大黒天像」の極印は、大黒天像の右側に余白がある（写真６㊦の赤色〇印）。本資料の「常是 大黒天像」の極印では「常是」の左側に余白があるのに対し、写真６の極印は大黒天像の右側に余白がある。このことから「常是 大黒天像」の極印には、本資料の右寄せと写真６の左寄せの２種類があることが確認できる。

（４）銀座と銀貨

伏見銀座

銀座の起源は、豊臣秀吉がその晩年、和泉国堺（大阪府堺市）と京都の銀吹屋（ぎんふきや）20人を大坂に集め、「常是座（じょうぜざ）」を結成させ、それまで個別に行われてきた銀貨の製造、すなわち一定の銀品位に製錬して信用保証の意味から極印を打刻する業務を、この座のもとで統一したことにある。

慶長５年（1600）関ケ原の戦勝を得た徳川家康は、翌年５月近江国大津の豪商末吉（すえよし）官兵衛の建議を採用して銀座を取り立てた。これは10人の頭役（とうやく）（頭人）を決めて座人制をとり、堺の銀吹師であった湯浅作兵衛（常是、以後「大黒（だいこく）常是」家）を銀吹人（ぎんふきにん）（銀吹所頭人、銀貨製造最高責任者）に任命し、これを末吉勘兵衛と後藤庄三郎光次（御金銀改役（あらためやく））に監督させるものであった。これに伴い、家康は銀遣いを取引慣習とする畿内・西国を念頭におき、統一銀貨である丁銀（廃貨となって慶長銀の名称ができる）の全国的供給をはかるため、京都郊外の伏見に４町歩の屋敷を拝領させ、諸国灰吹（はいふき）銀・極印銀の買収、銀貨の製造と鑑定などにあたる銀座（御役所・銀吹所）を設立させた。

銀座に近接した場所にはやがて銀座人・銀吹人と両替商が集住し、周辺は両替町の名称がつけられた。

京都銀座

慶長13年（1608）、江戸幕府は伏見の銀座を京都へ移転させ、京都室町と烏丸の間、二条から三条までの間の４町歩の拝領屋敷に新規に銀座が誕生した。銀座に近接した両替御用所や銀座人・銀吹人が集住し、多くの両替商も開業した。

銀座はこれ以降、江戸・駿府（駿河国府中、徳川家康の存命期間だけ銀貨を製造、現静岡市）にも設置され、大坂・長崎などには出張所ができたが、これらについては出土した極印鑽とは関係しないため省略する。

銀貨の丁銀・小玉銀

銀座では銀貨である丁銀・小玉銀（こだまぎん）を製造した。その名称は、幕府公法史における法令や通達などの史料では、「丁銀」と「小玉銀」としてしか明示されず、古貨幣収集界で主として通称される「豆板銀」は、通用当時の民間使用例は散見されるものの、いわゆる収集界用語である。

同様に極小の小玉銀を「露銀（つゆぎん）」と称したり、大黒を形象した極印が表裏面に打刻されたものを「両面大黒」（贈答儀礼用に特製）などと称する例は、通用当時の使用例としては皆無であり、基本的には収集界用語であることを認識する必要がある。

さて、丁銀・小玉銀ともに、その製造は「鋳造」であった。なお、江戸時代後期になって登場す

写真７　慶長丁銀前期（写真：銀座コイン提供）

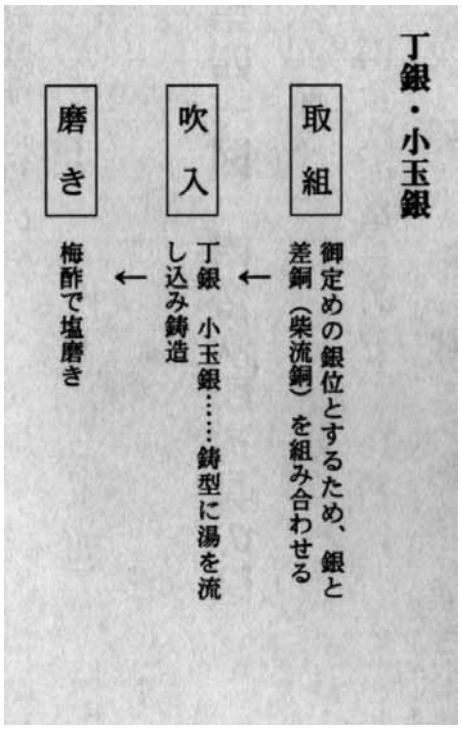


図１　鋳造工程

る銀貨、すなわち南鐐二朱銀や同一朱銀、天保一分銀などの金称呼銀貨は、基本的に「鍛造」（叩いて延ばす）であった。それぞれの銀貨には、製造工程の最終段階で吹所頭人「常是」などの極印が打刻され、とりわけ「常是」の名称は代替わり以後も、銀品位を保証するロゴマークとして、幕末に至るまで極印銘として継承・打刻され続けた。

丁銀は写真７に掲げたように、収集界ではナマコ（海鼠）を連想するふっくらとした銀塊とされ、それに極印を打刻したものである。極印は「常是（大黒天像）」と「常是 寶」の２種類からなり、加えて慶長・正徳・享保の丁銀以外は「（年紀銘の１文字）」が、基本点には表面にだけ連打されている（裏面にも打刻されたものは両面大黒と収集界では通称）。その区別は年紀銘極印によって識別が容易であるが、慶長・正徳・享保の丁銀については基本的に同一銀位でもあってそれがなく、「常是（大黒天像）」と「常是 寶」の極印の特徴によってなされている。なお、大黒天像の形象は、大黒天が２俵の米俵の上に乗って立ち、向かって右手には大袋の口紐を持ち、左手には打ち出の小槌を持って振り上げている。

（５）丁銀・小玉銀の製造工程

製造工程

丁銀・小玉銀ともに、その製造工程を解説する史料は多く伝存するが、それを彩色図解する銀座絵巻は１点しか現存が確認できない。国立国会図書館（古典籍史料室）が購入・所蔵する「銀座巻物」と登録（図書館が命名）される史料である。描かれた絵から判断して写本ではなく、天保８年（1837）以降の江戸時代に調製された原本とみなされる。なお、この絵巻の全貌は、「国会図書館デジタルコレクション」においてウェブ配信されている。

それによって判明する製造工程の詳細は、図１の通りである。このうち今回出土した極印鑽の解説にあたって注目されるのは、第42図常是丁銀吹所道具の図である（写真８）。これには極印槌と極印が描かれている。向かって左側３点の極印はいわゆる「極印鑽」（極印印面が刻まれる）、右端

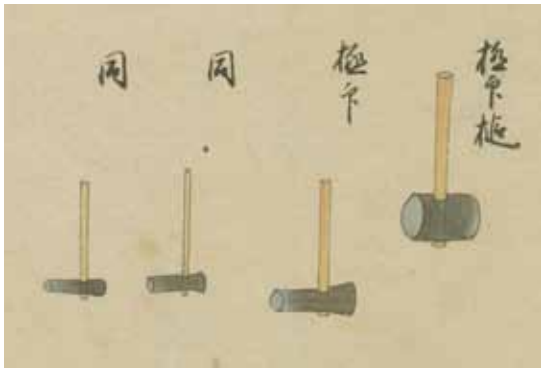


写真８　銀座巻物［２］　常是丁銀吹所道具の図
国立国会図書館蔵

写真９　銀座巻物［１］　極印打上所の図
国立国会図書館蔵

の「極印槌」（本来なら「極印鎚」と表記されるべきか）は、それに続いて並べられる「極印」を丁銀・小玉銀の上面に据え付け、その上部を強打する金槌に比定される。印刻面など詳細が描かれていないのが残念であるが、その柄の部分は薄茶色で、「極印」の部分は灰黒色で着色されており、それぞれ材質は木と鉄であったと想定される。

出土した極印鑽には柄の部分がないものの、基本的な道具の使用法は同一とみられる。

なお、同絵巻の第13図極印打上所の図は丁銀・小玉銀ではなく、鍛造の一分銀の極印打刻を描いたものであるが、使用法はほぼ同一とみなされるので、参考に供するため写真９に掲げておく。

（６）慶長丁銀の製造地

丁銀の製造地は慶長６年（1601）からは堺の銀座、慶長13年（1608）からは京都両替町の銀座であった（ほかに駿府で慶長期に一時製造）。出土した極印鑽が真正の常是極印であったとして、どこで使用された確率が高いかといえば、京都銀座であろう。出土地も洛内に比定されるからである。

幕末の大判座や金座に通勤する江戸の職人については、その居住地が判明するが、けっして大判座・金座の所在地に近接したわけではく、半径10㎞内外の者が例外でなく認められた。したがって、出土地が京都銀座に近接している必要はむろんない。

（７）験極印と出土した極印鑽（極印鏨）

極印の比定

慶長丁銀の製造は、慶長６年（1601）から元禄８年（1695）に至る95年という長期間に及び、その都度、基本構造がほぼ踏襲された極印が新規に作り替えられて打刻された。したがって、その極印の構造には微細な相異があり、実に多種の分類ができるほど製作数は多数にのぼると予想される。

出土した極印鑽の寸法（極印面外枠）は、最大の数値としては縦17.41㎜、横33.97㎜の範囲に収まっている。「常是」文字と大黒天像のそれぞれ中心点の距離は、12㎜前後であることが特徴として指摘できる。

その極印影の造形的特徴を根拠にする古貨幣収集界の分類慣行によれば、出土した極印鑽は慶長丁銀に打刻された「常是（大黒天像）」、それも「前期」と分類されるものに打刻された極印鑽に近似すると判断される。極印の造形的特徴としては、慶長丁銀のほかの極印と比較すると、「常是」文字の字画に細い、太いが顕著であり、大黒天像の下部の米俵が丸みを帯びていることなどがあげられる。伝世する慶長丁銀から採取した極印打刻影を、写真10として掲げておく。なお、この分類の比定が妥当であるならば、この極印鑽が使用されたのは慶長期ではなく、つぎなる元和・寛永期以降とすることができる。

写真10　慶長丁銀前期極印打刻影

けれども、それが銀座で使用されたものが非合法に流出したのか、民間で偽銀貨の丁銀を製造する時に使用したものが遺棄されたかの判別は容易

ではない。大判座後藤四郎兵衛家史料によれば、大判製造に使用した極印類は製造が終了した際に、すべて印面を潰して廃棄される原則が記されている。これは原則であって、実態は依然として謎である。

類似する極印鑽類

かつて調査した新潟県佐渡高校同窓会所蔵「舟崎文庫」に含まれる、佐渡金銀山関係の道具類のなかに、出土品に酷似した極印鑽の拓本影が伝存していた。こちらは小判の原資となる筋金（すじがね）に打刻された極印であり、その造形が異なることを除けば、出土品の極印鑽とほぼ同一の使用目的で製造されたものである。

また、東京大学史料編纂所が所蔵する大判座後藤四郎兵衛家資料のなかにも、大判に打刻する「五三桐紋」極印ではあるが、やはりほぼ同一の使用目的で製造された極印鑽類が含まれていた。

はたして大黒常是家での極印類の管理はいかがであったろうか。案外、江戸前期は今日想定するよりもかなり緩い管理であって、職人が廃棄された極印鑽を記念品としてそのまま持ち出すことが簡単であったとも予想される。慶長丁銀に限ったことではなく、江戸時代を通じて丁銀と小判の偽造は間断なく続いており、偽丁銀の極印が伝存・出土する可能性ははるかに高いであろう。

丁銀の極印鑽を見ることははじめてである。しかし、文化庁や地方自治体の依頼で鑑定にあたった際、江戸時代に製造された偽小判や偽丁銀の現物を見ることはしばしばあった。しかし、いずれも稚拙な極印影ばかりであり、それらと比較して、この出土した極印鑽は摩耗こそ見られるものの、かなり精巧に製作されていた痕跡がうかがえ、銀座で使用された極印鑽であったとしても不思議ではないと思われる。

なお、長期製造の慶長丁銀の伝世品から、同一の極印影を探し出す行為は無駄ではないが、今日照合につかうOCRを援用したとしても、やはり長期のデータの積み重ねとそのための膨大な時間が必要となろう。

（８）慶長期の史料に見える偽銀の横行

慶長期の偽銀貨史料

慶長期における偽銀貨通用の痕跡を残す史料の伝存は皆無であるが、その一端が判明する史料の伝存を、写本ながらも確認することができた。以下の史料は、ともに金座の当主であった後藤三右衛門光亨（みつあきら）が、天保15年（1844）３月15日に完成し、生家に遺贈した金座初代後藤庄三郎光次宛書状の写本「朶雲箋帖（だうんせんちょう）」（長野県個人所蔵）から、近年採取したものである。なお、同帳の収録範囲は、慶長13年（1608）から元和２年（1616）に絞り込むことができる。まず史料を掲げておきたい。

〔史料１〕年未詳三月一一日　板倉伊賀守勝重書状写　松平右衛門・後藤庄三郎宛

以　上

急度申候、先日申越候筒井銀子、先日弐百目伏見迄届置申候、御左右次第何方へ成共渡し可申候、右之内こま（細銀）もはい（灰吹）ふきも、にせ（偽）も少御座候間、常是ニ見せつゝ（包）ミわけおき申候、相州所之

儀ハ、預り主中差上可申由申候間、請取迄所ニおき可申候、さかい(堺)へハ長谷川忠兵へより申越候、其かね預り主長さきへ参候間、二、三日之うちニ可罷上候間、尋候て可申上由、さかいより申越候、可被成其御心得候、伏見ニ御座候銀子も主外へ参候間、尋候て可申上之由、是又長喜兵へ被申候、猶近日可申上候、恐惶謹言

（板倉）

板　伊賀守

三月十一日　　勝重（花押）

松　右衛門殿（松平右衛門佐正綱）

後　庄三郎殿

〔史料２〕年未詳七月六日　島田兵四郎・米津勘兵衛・土井大炊助・酒井備後守書状写　後藤庄三郎宛

猶以、安対馬(安藤重信)ハ少煩気ニ候間、かひつ(加筆)無之候、以上

一筆申入候、仍於当地ニ似せ(偽)銀仕候はそ(訴)人御座候てめしとり(召捕)、彼者の道具改候処ニ、にせ銀こくい(極印)銅なと殊外取出し、無紛仕合ニ候間、彼悪人もろんし不申候、京都ニも同類在之由申候間、板伊州(板倉勝重)迄申入候、弥せんさく(穿鑿)いたし、重て可申入候、彼にせ銀其外道具共、銀座ノ衆よひよせ(呼寄)為見候ハヽ、きもつふし(肝潰)喜申候、為其似せ銀仕候者之妻女駿府ニ御座候由申候間、彦坂九兵衛(光正)殿迄申入候間、可有御相談候、恐々謹言

島田兵四郎（利正）

七月六日　　米津勘兵衛（田政）

土井大炊助（利勝）

酒井備後守（忠利）

後藤庄三郎殿

人々御中

偽銀貨の横行

史料１は、京都所司代の板倉勝重からの書状写である。そのなかで冒頭に「筒井銀子（ぎんす）」とみえる銀子は、慶長13年（1608）改易（かいえき）（家名断絶、領地没収）となった筒井定次（さだつぐ）からの没収品を指すものであろうか。先日それが伏見へ200匁分届いたとし、その処置について伺っている。ただし、そのうち「こま」（細銀）や「はいふき」（灰吹銀）のうちに偽物が若干ありえるから、銀座「常是」に鑑定させ、包封銀（包銀）にしたとする。丁銀や小玉銀は裸のまま使うのでなく、必ず両替商で前もって量目を計ってもらい、信用を付加して包封したものを取引したのである。

史料２は、江戸の徳川秀忠の側近衆からの書状写である。それによれば、「当地」（江戸）で偽銀貨を製造する者があると「そ（訴）人」（密告）があり、その者を逮捕して道具を改めたところ、「にせ銀」の「こくい」（極印）銅（鑽の誤？）などがあったという。物証があり悪事の犯行は紛れないことが判明した。京都でも同類の犯行があるとのことであり、所司代の板倉勝重までそのことを伝え、その穿鑿を強化するよう申し入れた。その偽銀や道具などを、銀座の衆を呼び寄せ見せた

ところ、彼らは「きもつふし（肝潰し）」（その精確な偽造に驚愕）て（逮捕されたことに）喜悦したとする。なお、犯人の妻女は駿府で確保されているとしている。

このように、精巧な極印鑽の偽造例が報告されている以上、出土した極印鑽に対する前述の見通しは再考を必要とするかもしれない。

（9）おわりに

したがって、出土極印鑽はその極印の特徴から、慶長丁銀に打刻する道具であったか、慶長丁銀偽造のために打刻する道具であったかの、いずれかであると判断される。それもその製作時期は慶長期ではなく、元和・寛永期をくだる可能性がある。

真贋にかかわらず、出土極印鑽は慶長丁銀に関連する貴重な遺物であることに間違いはない。この際広く一般に公開して、今後各方面からの研究に役立つ共有の資料や文化財として、保存・継承されることが望ましい。

〔文責　（1）～（3）：永井久美男、（4）～（9）：西脇　康〕

註

1）　永井久美男・橋本 久「兵庫県宝塚安倉出土の金銀貨」永井久美男編『近世の出土銭Ⅱ－分類図版篇－』 兵庫埋蔵銭調査会　1998年　巻頭図版△7・157-162頁

2）　森島康雄「京都市千本出水の金銀貨」永井久美男編『近世の出土銭Ⅱ－分類図版篇－』 兵庫埋蔵銭調査会　1998年　巻頭図版△4・153-156頁

参考文献

1　田谷博吉『近世銀座の研究』 吉川弘文館　1963年

2　西脇 康「大判座・金座の組織とその金貨」『出土銭貨』第10号　出土銭貨研究会　1998年

3　瀧澤武雄・西脇 康編著『日本史小百科　貨幣』 東京堂出版　1999年

4　西脇 康『絵解き　金座：銀座絵巻』書信館出版貨幣叢書6　書信館出版　2003年

5　西脇 康「密度測定値による古金銀貨鑑別法－完全非破壊分析法の副産物－」『出土銭貨研究』出土銭貨研究会研究紀要 第2号　出土銭貨研究会　2007年

6　西脇 康編著『絵解き　銀座絵巻』銀座コイン創立50周年記念出版　銀座コイン　2018年　非売品

7　『日本貨幣カタログ』2021年度版　日本貨幣商協同組合　2020年

8　西脇 康『大判座・金座の研究（仮題）』 日本史史料研究会　2021年発行予定

付章２　極印鑽（たがね）の自然科学分析

関　晃史（公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所）
山口繁生（公益財団法人元興寺文化財研究所）

（１）はじめに

この報告では、濠１（御土居濠）から出土した極印鑽（鏨）の自然科学分析を行い、得られた結果について述べる。分析については、公益財団法人元興寺文化財研究所と株式会社 堀場テクノサービスに依頼し、実施したものである。

（２）分析対象について

対象とした極印鑽は、近世銀貨の丁銀や豆板銀にその品位を保証する意味で打刻するための道具である。印面には大黒天像と常是の二文字が凹部で表現され、大黒天の顔や文字の特徴から慶長丁銀に打刻したものと類似する（図１）。クリーニングによって表面の錆は概ね除去しているが、凹部には錆を残す箇所もある。

（３）分析内容と分析条件

Ｘ線ＣＴ撮影

印面の形状観察、及び内部観察のため、Ｘ線コンピュータ断層撮影（ＣＴ撮影）を行った。Ｘ線ＣＴは試料のＸ線透過撮影を異なる角度から複数回行い、得られたＸ線透過画像をもとに試料の立体構造モデルを計算によって構築する分析方法である。分析には公益財団法人元興寺文化財研究所設置の「マイクロＣＴスキャナTOSCANER-32300 FD（東芝ITコントロールシステム製）・ＣＴデータ解析用ソフトウェアVGstudioMAX（Volume Graphics）」を用いた。分析条件は管電圧210kV、管電流400μA、露光時間266μsec/枚、撮影枚数1200枚/360°、積算４回で撮影を行った。

蛍光Ｘ線分析、蛍光Ｘ線マッピング分析

蛍光Ｘ線分析では、ターゲットにＸ線を照射して発生する各元素固有の蛍光Ｘ線から、照射スポットを構成する元素を同定する。蛍光Ｘ線マッピング分析においては、資料表面を複数の微小領域に分割し、各微小領域において蛍光Ｘ線分析を行う。得られたデータから各元素のシグナル強度を２次元化し、その分布状態を色によって視覚化する。これらの分析には株式会社 堀場テクノサービス設置の「微小部Ｘ線分析装置XGT-9000（堀場製作所製）・ソフトVer.1.2.1.10」を用いた。蛍光Ｘ線分析の条件は管電圧：50kV、電流：自動設定60~241μA、パルス処理時間：P4、フィルタ：None、Ｘ線導管の種類：高輝度用ビーム（φ100μm）、測定時間：100秒、試料雰囲気は全体真空（試料室及び光学系部分を真空に引いた状態）である。また、蛍光Ｘ線マッピング分析の条件は管電圧：50kV、電流：150μA、パルス処理時間：P2、フィルタ：None、Ｘ線導管の種類：高輝

度用ビーム（φ100μm）、測定時間：１時間15分、マッピング範囲：33.792㎜×16.632㎜、ピクセル数：256×126、ピクセル分解能：132μm、試料雰囲気は全体真空である。

（４）結果及び考察

Ｘ線CT

Ｘ線CTで得られた断面像を図２・３に示す。印面の彫が浅く明瞭には確認できないが、大黒天像の足元の２つの楕円形凹部において、縦に走る凸線が確認された（図２）。目視による観察では錆によって確認できないが、俵の模様を表す凸線があるものと考えられる。また、大黒天像の周辺に電子密度の高い箇所が複数観察された（図３）。

蛍光Ｘ線分析、蛍光Ｘ線マッピング分析

得られた印面の元素マッピング像を図４～12に、蛍光Ｘ線分析で得られたデータを図13・14に示す。検出した主な元素にはFe（鉄）（図４）、Ag（銀）（図５）、Pb（鉛）（図６）、Cu（銅）（図７）、僅かなAu（金）（図８）のほか、P（リン）（図９）、Mn（マンガン）（図10）がある。このうち、Feは地金であり、PとMnは土壌由来の元素と考えた。したがって、Cu、Ag、Pb、Auを含む物体に対して打刻した可能性が考えられる。Ag、Pb、Cu、を重ね合わせたマッピング像（図11・12）をみると、特に大黒天像の右側半身から常是にかけてはAg、Cuの検出が強く、両元素の重複を示す紫色の箇所も多々みられる。また、Auは３箇所で確認できるがいずれの箇所もAg、Cuと重複している。それに対し、Pbは大黒天像の左側半身で検出が強い傾向がみられ、Ag、Cuとの重複を示す黄色、水色、白色の箇所は少なく、PbはAg、Cu、Auとは異なる分布を示している。特に、Ｘ線CTで確認した電子密度の高い箇所では、Pb単体で存在していることがマッピング像からわかる。また、図４において俵の模様も確認できる。

以上のように、印面からは実際に丁銀や豆板銀に含まれる元素を検出したほか、別の元素の存在も確認できた。慶長丁銀の主成分としてはAgとCuで概ね８：２といわれており、そこに灰吹銀で用いられるPbが僅かに含まれることは不自然ではない。ただし、今回の様にPbが単体で存在する理由には、可能性の一つとしてPb含有率の高い物体に対する打刻も考えられる。極印が打たれた鉛製貨幣の存在は現段階で確認できていないが、贋金としての鉛製丁銀が寛政11年（1799）の文字資料に登場する[1)]。そこでは贋物と思われる常是壱枚包に鉛製丁銀が入っていたとあるが、極印の有無は確認できない。今回の分析によって得られた元素の分布は、極印鑽で打刻した対象物や、打刻時の当て方を示す可能性があり、特筆すべき結果と言える。しかし、極印鑽の使用や保管、メンテナンスなど、当時の取り扱い状況には明らかになっていない部分が多く、ここでは可能性を提示するに留める。

註

１）　小田 忠「包銀の流通－包銀の流通は人々にとって役に立ったか－」『大阪商業大学商業史博物館紀要』 大阪商業大学商業史博物館　2001年　74頁

参考文献

早川泰弘・三浦定俊・大貫摩里「江戸期銀貨の品位と色揚げに関する科学的調査」『金融研究所ディスカッション・ペーパー・シリーズ　2001-Ｊ-13』　日本銀行金融研究所　2001年

西脇　康「絵解き　金座銀座絵巻－金吹方之図・幕府銀座之図－」　書信館出版株式会社　2003年

田口智子・桐野文良「江戸時代貨幣『豆板銀』の表面層の構造」『日本金属学会誌　第76巻　第４号』　公益社団法人日本金属学会　2012年

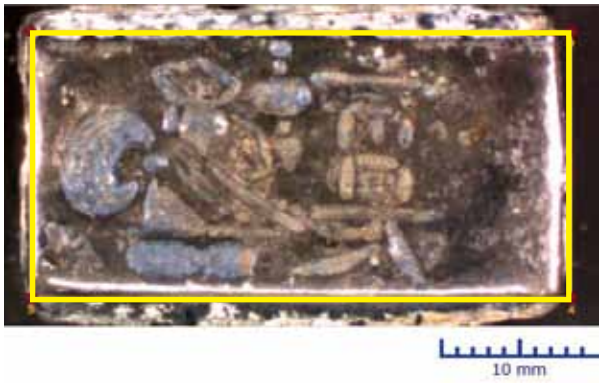


図１　印面写真（黄枠はマッピング範囲）

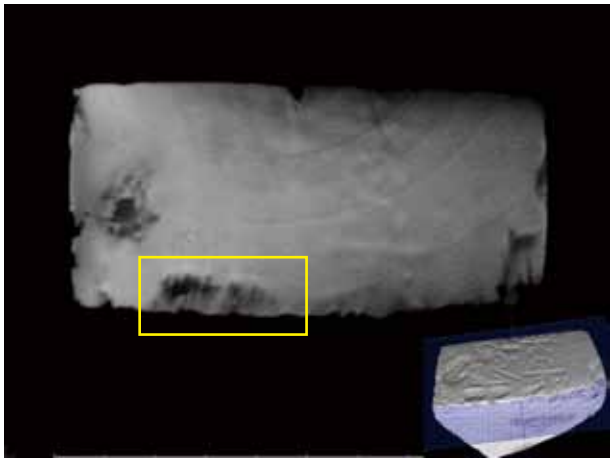


図２　Ｘ線CT断面像
（黄枠に大黒天足元の俵の模様が確認できる）

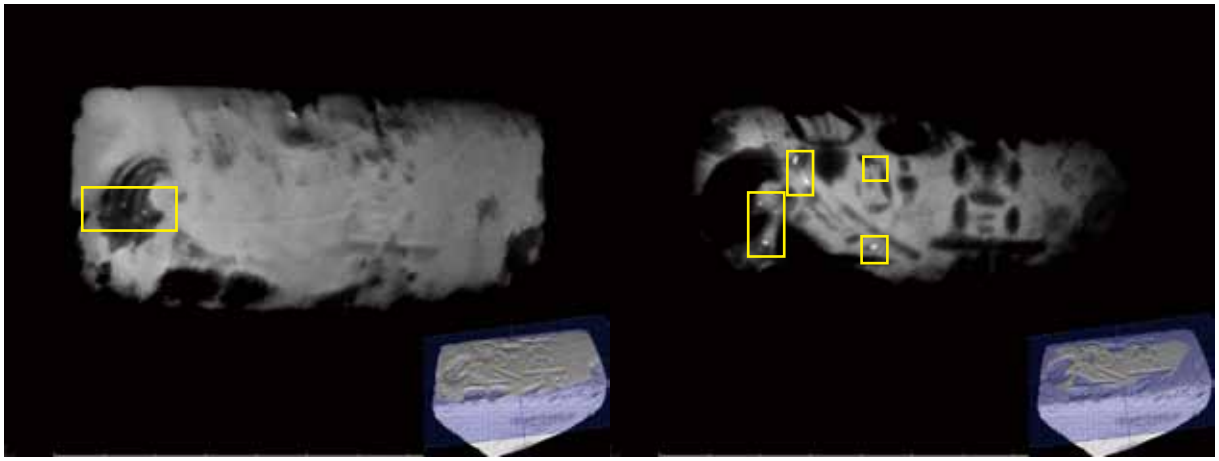


図３　Ｘ線CT断面像
（黄枠に電子密度が高い箇所を確認できる）

図４　マッピング元素像　Fe（鉄）白色

5 mm

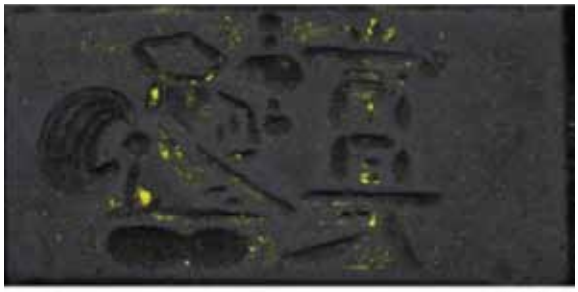


図５　マッピング重ね合わせ像
黄色：Ag（銀）、白：Fe（鉄）

図６　マッピング重ね合わせ像
黄色：Pb（鉛）、白：Fe（鉄）

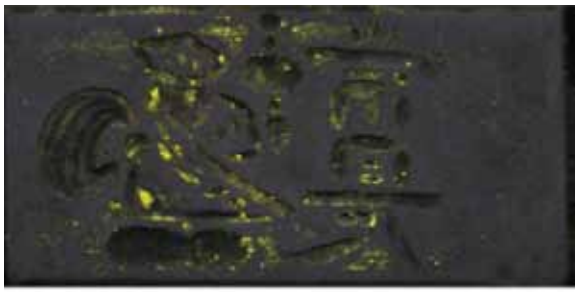


図７　マッピング重ね合わせ像
黄色：Cu（銅）、白：Fe（鉄）

図８　マッピング重ね合わせ像
黄色：Au（金）、白：Fe（鉄）

図９　マッピング重ね合わせ像
黄色：P（リン）、白：Fe（鉄）

図 10　マッピング重ね合わせ像
黄色：Mn（マンガン）、白：Fe（鉄）

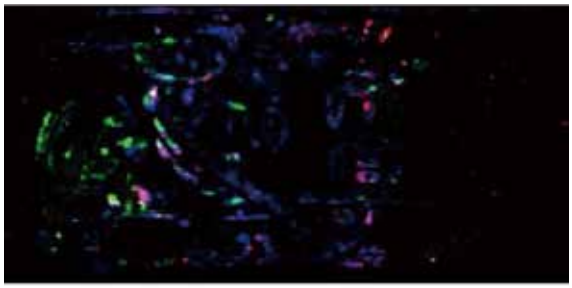


図 11　マッピング重ね合わせ像
赤：Ag（銀）、緑：Pb（鉛）、青：Cu（銅）

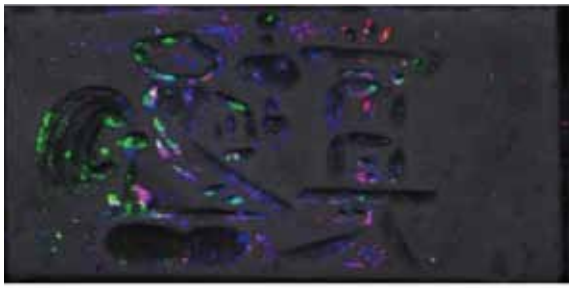
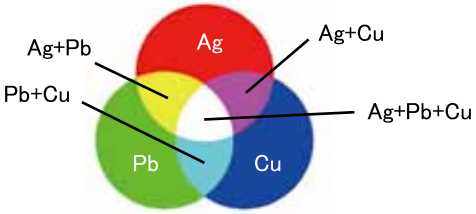


図 12　マッピング重ね合わせ像
赤：Ag（銀）、緑：Pb（鉛）、青：Cu（銅）、白：Fe（鉄）



凡例：図11・12　赤・緑・青の3色の合成図

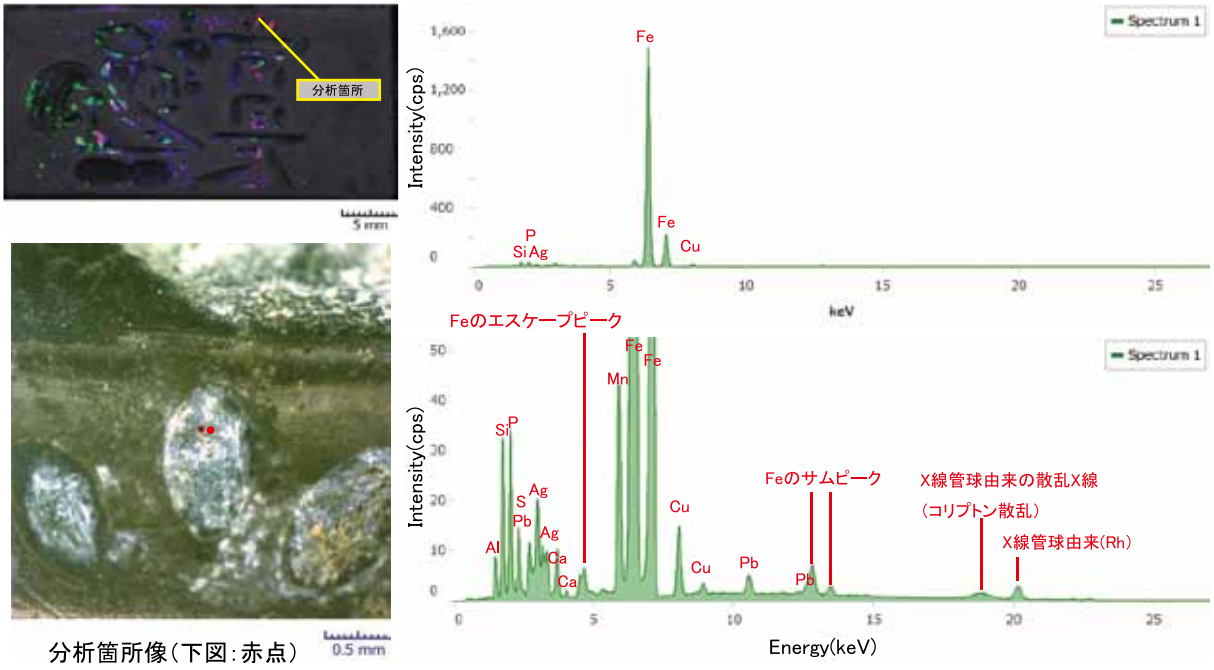


図13　蛍光X線スペクトル（上：全体、下：Y軸を拡大）

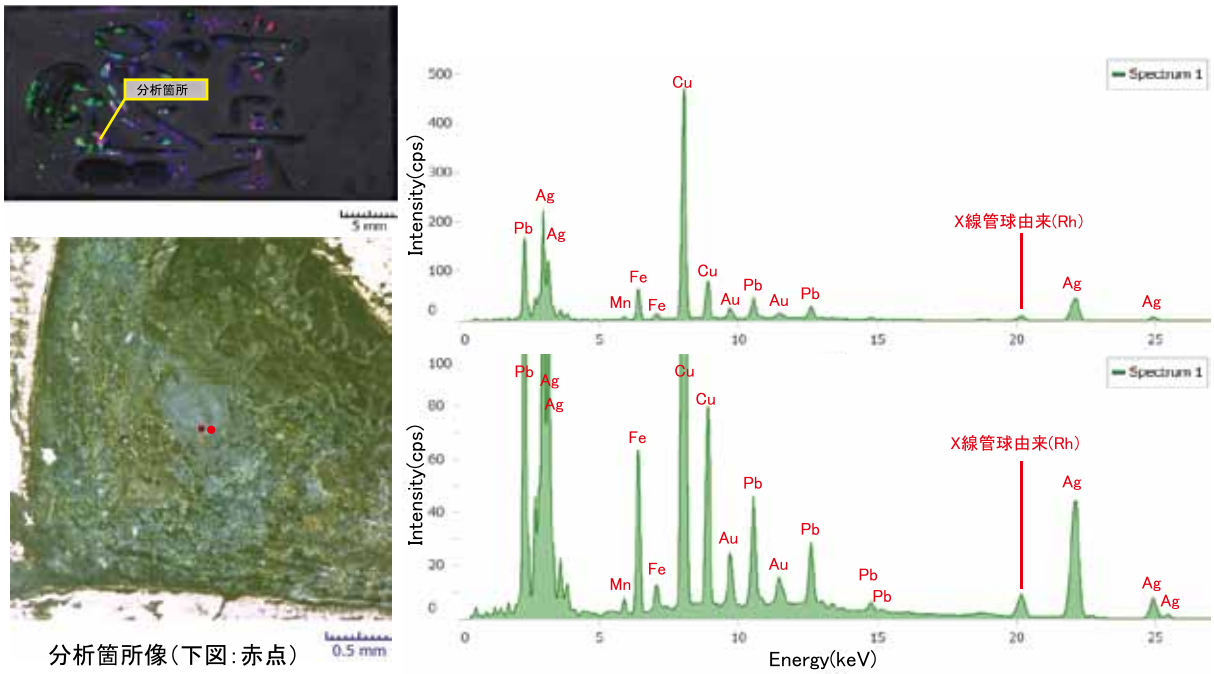


図14　蛍光X線スペクトル（上：全体、下：Y軸を拡大）

図　　版

1　調査区全景（北から）

2　濠１（東北東から）

3　濠１北壁断面（東から）

図版２　遺構

１　井戸２（北西から）

２　井戸２曲物底板出土状況（東北東から）

３　井戸２完掘状況（北西から)

報　告　書　抄　録

ふりがな	へいあんきょううきょうろくじょういちぼうさんちょうあと・おどいあと
書名	平安京右京六条一坊三町跡・御土居跡
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
シリーズ番号	２０２０－８
編著者名	柏田有香
編集機関	公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
発行所	公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
発行年月日	西暦2021年６月30日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
平安京跡（へいあんきょうあと） 御土居跡（おどいあと）	京都市下京区（きょうとししもぎょうく） 中堂寺南町（ちゅうどうじみなみまち） 130番地１ の一部	26100	1 149	34度 59分 44秒	135度 44分 29秒	2021年１月18日～2021年３月４日	240㎡	卸売市場施設整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平安京跡 御土居跡	都城跡 土塁跡	平安時代	井戸	土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、瓦類、木製品	御土居の濠から、慶長丁銀の極印鑽が出土した。
		室町時代		土師器、焼締陶器、輸入陶磁器	
		安土桃山時代～江戸時代	濠	土師器、焼締陶器、施釉陶器、磁器、木製品、金属製品	

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2020-8

平安京右京六条一坊三町跡・御土居跡

発行日　2021年6月30日

編　集
発　行　公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

住　所　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435　TEL 075-415-0521
http://www.kyoto-arc.or.jp/

印　刷　三星商事印刷株式会社

住　所　京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093　TEL 075-256-0961